

資料翻刻 1

石川淳日記

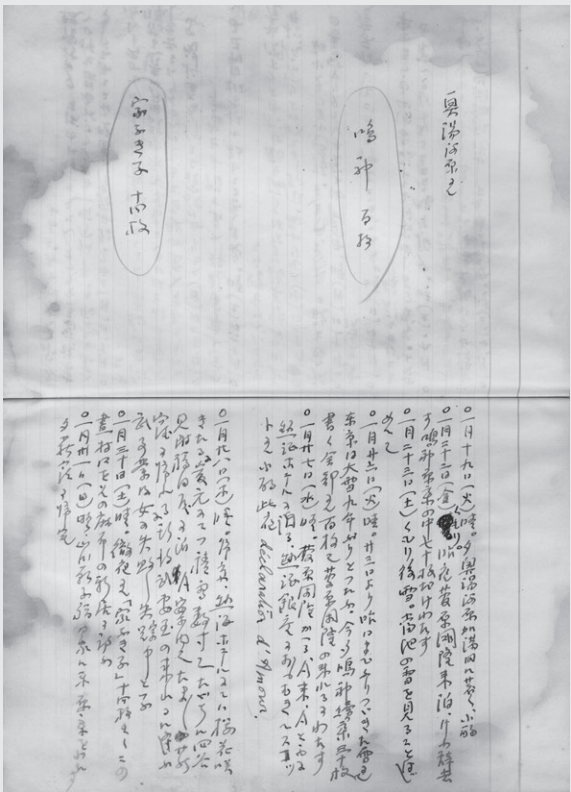
昭和27年1月1日
昭和29年8月25日

昭和28年に越した杉並区清水の家の書斎にて



【資料概要】

資料番号129124 《石川淳日記 昭和27年1月1日―12月31日》
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、
縦書、自筆部分54面、ペン書、一部赤鉛筆書
資料番号129125 《石川淳日記 昭和28年1月1日―12月31日》
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、
縦書、自筆部分45面、ペン書、一部赤鉛筆書
資料番号129126 《石川淳日記 昭和29年1月1日―8月25日》
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、
縦書、自筆部分7面、ペン書、一部赤鉛筆書



石川淳日記 昭和29年1月1日―8月25日

三点とも、石川眞樹氏寄贈（令和元年度）。日記本文は大学ノート見開きの右面に縦書で書かれ、左面（縦書なので上段に当たる）には入稿記録、旅行先、メモ書きなどを記載。

本資料は、石川淳（明治三二―一八九九）年〰昭和六二〔一九八七〕年による昭和二七（一九五二）年、二八（一九五三）年、二九（一九五四）年の自筆日記。前巻で翻刻紹介した昭和二五、六年分の日記（資料番号129123）と同体裁の大学ノートで、書き方、内容（執筆、入稿記録、書籍購入と読書録、外出先での交友、来訪者対応など）もこれを踏襲し、全集未収録の自作句などが詠み込まれているのも同様。ただし、年を追うごとに記載は少なくなっている。

【凡例】

- 漢字の旧字体は新字にあらためた。ただし、人名・固有名詞など是一部表記（旧字）通りとした
- 仮名 表記通り（ほぼ旧仮名、但しカタカナ表記の撥音便は表記通り）
- 数字・記号 表記通り
- 読み易いように文と文の間に適宜一字空き挿入。なお句読点の配置は表記通り
- 外国語 フランス語・英語・漢文の表記通り。適宜訳を（一）で補記した
- 本文中の住所について、個人情報保護の観点から一部を■■■■で表した
- 本文対面頁（上段）に本人筆の脱稿記録、覚書および翻刻者註（*）は各日末尾に記載
- 註は適宜。本誌上巻で入れた事項、人物は省略。店名は業態が判りづらい場合や頒出店で店名表記が揺れる際に入れた

資料翻刻1

石川淳日記（昭和27（29）年）

昭和二十七年壬辰 一九五二年

○一月一日（火）晴、日あたゝかにして無事さいはひに訪客のわづらはしきものなし、燕居して戸外に羽根の音を聞く 羽根の音冴ゆるも春のたよりかな、夜クロードルとシユアレスとの往復書簡を読む、呉竹の夜のいとなみは辰の春 雲の通ひ路ふけて入らん

○一月二日（水）晴、終日家居、たはむれに三ッ物俳諧をこゝろむ*
発句 羽根の音軒に冴えたる寒さかな ワキ 袖ひるがへす色のとり
〳 第三句 春さきの物見の支度せはしくて

*この三ッ物は一月十六日の項に記載のとおり表裏十二句となり、随筆〔首尾〕〔群像〕同年3月号初出、『夷齋俚言』収録 に発表

○一月四日（金）晴。鳩居堂にて色紙をあがなふ、よし田にて小酌、夜三越階上の芝居小屋にて俳優座「ウインゾアの陽気な女房たち」を観る、佐藤美子に逢ふ、帰途烏森若竹にて小酌、ともに酒をくむもの小林秀雄河上徹太郎今日出海中村光夫*福田恆存神西清也、よし田にてブーチャンより唐津焼の茶碗をおくらす

*中村光夫 文芸評論家、小説家、劇作家

○一月六日（日）雨まじりの雪ふる、山川朝子を世田谷なるその家に訪ひて深更にかへる、さる二日つくりたる三ッ物を色紙に書いて朝子にあたふ、但第三句を春はまた物見の支度とあらたむ

○一月七日（月）晴。銀座よし田におもむきて小酌。この店客あしらひよろしきにつき贈るに河野通勢筆梅花図*をもつてす 帰途若竹にてまた小酌

*河野通勢筆梅花図 本誌「上巻」の昭和二十五年三月十八日の項で入手とある一幅か

○一月九日（水）晴。昨夜徳田雅彦鈴木貢と銀座にてのみはなはだ疲れたり 今日菅原国隆来話、またともに銀座よし田におもむきて小酌、弁護士正木晃といふひと未知のひとなれどもはがきを寄せ来つて余の随筆模倣の効用を愛読せりといふ

○一月十二日（土）晴寒し、終日家居、群像川島勝来話、夜に入つて窪田啓作来話、窪田咄に齋藤寛は窪田妻の伯父にあたるよしにて寛今日にては進駐軍に就職し鶴沼なる某家物置に住みてその状ほとんど虚脱

に似たりといふ

○一月十四日(月)雨。港稅務事務所より(芝葺手町、神谷町電停前)「事業稅」と称して不当の稅金を徵收督促に来れるにつき同所長瀬山龍雄宛に抗議を提出す 夜安部公房勅使河原宏桂川寛*來話、閑談數刻、勅使河原父よりホワイトホース一本クレーヴンA二缶を贈らる

*桂川寛 画家。安部公房、勅使河原宏らと「世紀の會」に参加、安部の「壁」の挿画も担当

○一月十六日(水)晴。夜来首尾十八枚を草す、群像三月号に寄せんがため也、首尾十二句左の如し、但はじめの三句はさきにつくりたる三ツ物をもちゐたり

羽根の音軒に冴えたる寒さかな

袖ひるかへす色のとりく

春はまた物見の支度せはしくて

二階にひとり觸政*を読む

物干にながれる月の明けやすき

戸口の声は早立の客

湖上はるか秋のおもひは神にあり

故国の友を文にいましむ

ましはりはおみちの紅と散るものか

鏡台深く残る香水

花のかけ顔は二つにほひけり

絵具の売れる町のうらゝか

この日安部公房夫妻迎へに来りともに三田なる勅使河原蒼風稽古所に於ける新年宴会におもむく 盛會なり 岡本太郎藤川栄子徳田雅彦其他列席す、帰途徳田とともにエスポアルにおもむく 徳田及みな子高

輪に來りて濱田に泊る

上段：首尾十八枚

*鵜政 明代後期の詩人・袁宏道が著した飲酒指南書「鵜政」のこと

○一月十七日(木)晴。群像川島勝來、首尾の草彙をわたす、徳田雅彦と三人にて濱田にて語る

○一月二十一日(月)晴。午後一時より Marcel Carné 製作 Les enfants du paradis*の試写を読売ホールにて観る、フランス風の世話狂言にてジャン・ルイ・バロオの演技よし但マリヤ・カザレスはミスキャストにておもしろからず 帰途川島勝と吉田及若竹にて小酌

* Les enfants du paradis 正しくは Les enfants du paradis 『天井桟敷の人々』マルセル・カルネ監督のフランス映画

○一月二十六日(土)晴、夜来エセエ藝術家の永遠の敵を草しこれを文学界にわたす(二十八枚) 東京温泉にトルコ風呂に浴す 夜花房満三郎*と新はしにてのむ

上段：藝術家の永遠の敵 二十八枚

*花房満三郎 文藝春秋社の編集者

○一月二十八日(月)曇小雨、丸善におもむきJean Cocteau : Le Rappel à l'ordre をあがなふ、この店建物は新築したれども内容貧弱にて昔日のおもかげ無し、窪田啓作を東京銀行に訪ひ近くの喫茶店にて閑談、帰途銀座吉田及島森若竹にて小酌 よねにすしをみやげにもちて帰る

○一月二十九日(火)曇小雨、ブリッヂストーン館におもむき石橋コレクションの展覧を見る、帰途はせ川にて城左門に逢ひともに神楽坂の待合におもむきて小酌 城芸者をともして仮寓に來り深更にかへる芸者は城のなじみのものと見えたり

○一月三十日(水)晴、終日家居、新潮社より送り來れる夷齋筆談再校を一閱す 今冬あたたかにして大根みな太しと八百やの咄

○二月一日(金)雪ふる、夷齋筆談再校を閱了してこれを新潮社にわたす、夜日比谷公会堂にてモンブラン*ヴィオロン演奏を聴く、伴奏ジョア、この女史のピアノ佳なり 徳田雅彦と吉田エスポアルアムール小笹ずしなどのみあるく 徳田は高輪にて濱田泊

*モンブラン レイモン・ガロワモンブラン。作曲家、バイオリニスト

○二月三日(日)曇、いさゝか寒し、新宿紀伊国屋におもむきてフランスの本をあがなふ。Henri Michaux* : L'espace du dedans ; Ailleurs, Vercors : La marche à l'étoile, Marcel Arland* : Lettres de France, Jean Dutourd* : Une tête de chien. 帰途銀座よし田にて小酌、飯寓のまくに住む大野といふ青年昨夜今夜ともに佐藤美子の手紙を届け来る、オペラの案内状なり

* Henri Michaux アンリ・ミショー。フランスの詩人、画家

* Marcel Arland マルセル・アルラン。フランスの小説家、文芸評論家、脚本家

* Jean Dutourd ジャン・デュートル。フランスの小説家

○二月四日(月)雪ふる。夜銀座におもむきて佐藤美子に逢ふ、乱酔深更にかへる、節分也、美子とは premier baiser 也 (dans la voiture.)

○二月五日(火)立春、晴れたれどもはなはだ寒し、早朝東和商事におもむきてホフマン物語*の試写を観る、この写真美しくてよし、帰途東京温泉に浴し吉田にて小酌、佐藤美子川島勝に逢ふ。文学界にて借

* ホフマン物語 マイケル・パウエル、エメリック・プレスバーガー監督のイギリス映画

○二月六日(水)晴。寒し。終日家居、Jean Dutourd : Une tête de chienを読む、軽妙読むに堪へたり

* トトヤ 他に「ととや」「とゝや」の表記あり

○二月二十五日（月）くもり。夕東中野モナミにて堀田善衛*芥川賞受賞の会合に列す、帰途安部公房とともに新宿ととやにて小酌、深更雪ふる、雪中車にて帰宅

* 堀田善衛 小説家、評論家

○二月二十七日（水）晴。午後新潮社におもむきて夷齋筆談の装釘を見る。文藝春秋社にて高田保*の告別式に列す、銀座吉田にて小酌、尾崎士郎*に逢ふ 鈴木貢と新宿トトヤに転じてまたのむ

* 高田保 劇作家、随筆家

* 尾崎士郎 小説家

○二月二十八日（木）新宿におもむきて靴を購ふ、銀座にて東京温泉に浴す、よし田にて小酌、また烏森若竹にてひとりのむ 堀口大学*に逢ふ、昼晴夜曇深更雪となる

* 堀口大学 詩人、フランス文学者

○二月二十九日（金）雪のち曇。夜三越劇場にて文学座五十回公演マリウスを観る、佐藤美子に逢ふ 帰途銀座数軒にのみ泥酔深夜に帰る

○三月二日（日）晴あたたかし、終日家居、さきごろ山田有勝より沢渡恒遺藁集四月刊行予定のために序をもとめられたるにつきすなはち序三枚半を草す J-P Sartres : L'existentialisme est un humanisme を読む、考ふべきこと多くにはかに所感を記しがたし

○三月五日（水）Aragon* : L'homme communiste を読む、大丈夫はよろしく慟哭してこれを読むべし 西欧の雄弁とはけだしかくのごときスタイルをいふならむ、この日曇夜に入つて雪、エセエの藁を起す

* Aragon ルイ・アラゴン。フランスの小説家、詩人、評論家

○三月七日（金）小雪夜に入つて大雪となる、新潮社大田美和来 夷齋

をとどける、文藝春秋社におもむきて鈴木貢とブルドッグにて昼食、日本ばし壺中居にて青山二郎の装釘展を観る、久保田啓作を東京銀行に訪ひて喫茶店にて小憩帰宅、夜窪田来話 ローマイヤのミートパイを贈らる

* 壺中居 古美術商

○三月十七日（月）晴。角川書店におもむきて近江屋にて小酌 石田波郷*に逢ふ、句あり*

春浅きストーフ黒し明治軒 近江やに
売れて困る文庫本水温むなり 角川に
雛白酒の色に出でたり矢大臣 桂郎*に
くれなゐの花には季無し枕もと 波郷子に

* 石田波郷 俳人

* この時の句作をもとに随筆「歌仙」〔群像〕同年6月号、7月号初出『夷齋俚言』収録）が起稿された（五月十七日の項に脱稿記録あり）

* 桂郎 俳人で波郷門下の石川桂郎のことか

○三月十八日（火）曇、夜小雨、川島勝来話、群像へノ約束の寄藁を来月にのぼす、新潮社大田美和夷齋筆談の扉五百十五枚とどけ来る、昨夜角川書店より取り戻したる窪田啓作短篇集の原藁を酔余省線電車中に置きわすれたれば今日東京駅遺失物係に問合せにおもむかんとしたるをり窪田より電話あり 無名氏窪田に電話してその原藁を拾得したれば今夕七時半品川駅にてそれを渡すべしといひ来りたりとなん、けだし原藁入封筒に東京銀行の電話番号記しおきたればなり 夜窪田角川書店の鎗田をとまひて来る、原藁つゝがなく入手したりと語る

○三月十九日（水）暴風雨、銀座よし田におもむきて小酌、河上徹太郎に逢ふ、それより若竹におもむきたるに青山二郎に逢ひともにウー

筆談扉千五百枚届け来る、大田と銀座におもむきて吉田にて小酌、夕松竹試写室にてイタリヤ映画にがい米*を観る、帰途福田恆存豊田三郎*と有楽町にてビールをのむ、また烏森若竹にてひとり小酌、ウヅラ焼太だ美也 けふは余の誕生日也

* にがい米 ジュゼッペ・デ・サンティス監督作品

* 豊田三郎 小説家

○三月九日（日）晴、夜に入つて雨。昼銀座におもむきて東京温泉に浴し吉田にて小憩、夜文学界のためにエセエ歌ふ明日のために二十八枚を草す 暁におよんで雨声のはげしきを聴く

上段：歌ふ明日のために 二十八枚

○三月十日（月）晴、文学界に昨日の草藁をとどける 鈴木貢と吉田にて小酌、山田有勝を丸ビルの事務所に訪ひ沢渡恒遺作集の序をわたす、夜若竹におもむくに小林秀雄三好達治青山二郎と逢ふ、青山とウーピー及ブーサンにてのむ、またともに麻布一ノ橋におもむきて小料理屋にて小酌 深更女どもをしたがへて帰宅

○三月十一日（火）曇小雨、島尾敏雄来話、小岩の新居におちつきたりといふ、島尾をとまひて文藝春秋社におもむきまた松坂やにて二科展を観る、画の観るべきもの無し、吉田にて小酌、のちひとりにて東京温泉に浴す、夜はせ川におもむく 城左門山田有勝に逢ふ、城と他のバーにおもむきて深更に帰る、はせ川にて句を書く 石竹は淡紅水は温むへし

○三月十三日（木）晴。安部公房来話、安部母の手作りなるネクタイ二本贈らる。ともに銀座におもむきてビルゼン*にてビールをのむ

* ビルゼン ビアホール「ビルゼン」のこと。以降もしばしばビルゼンと表記

○三月十五日（土）晴。春暖。新潮社に夷齋筆談の署名扉五百九十七枚

ビーに転じて博奕す、ブーサンに立寄りて帰る

○三月二十日（木）晴。風強し、文藝春秋社におもむく、碓伊之助*に逢ふ、徳田雅彦鈴木貢とジュリヤンにて閑談、よし田におもむきてブーサンのカズ子を呼ぶ、菅原国隆に逢ふ、林せい子の勤めるバーに行く、菅原と別れてひとりエスポアルにて小酌 深更に帰る

* 碓伊之助 洋画家

○三月二十二日（土）晴。新潮社に夷齋筆談の署名扉を届ける、東京温泉に浴す、銀座よし田にて小酌、吉田健一に逢ふ、コロンビヤ試写室にてカルメン*を観る、愚劣にがにがしきものなり

* カルメン チャールズ・ヴィダー監督のアメリカ映画

○三月二十五日（火）晴、風つよし、岩波書店発行文学*の編集者来話、原藁依頼をことわる、わか宿はうつゝか夢の花蓋 かき寄せるへき言の葉もなし

* 文学 文芸誌

○三月二十六日（水）晴。東和商事試写室にて Sous le ciel de Paris, coule la seine*を観る、佐藤美子に逢ふ、敬*と三人にて三笠会館にて小酌、東京画廊におもむきてピカソ*の版画を観る、鳩の図みごととなり、帰途ひとり若竹におもむく、小林秀雄今日出海青山二郎堀口大学に逢ふ

* Sous le ciel de Paris coule la seine 「田里の空の下セーヌはながれる」 ジュリアン・デュヴィヴィエ監督のフランス映画

* 敬 洋画家で佐藤美子の夫・佐藤敬のことか

* ピカソ パブロ・ピカソ。スペインの画家

○三月二十八日（金）晴。小山清来話、太宰未亡人のために書きたる夷齋狂歌箱書をわたす、新宿紀伊国やにて Paul Valéry : Souvenirs poétiques, Stalin, La linguistique et l'impérialisme russe. Par Lucien

Laurat.*をあがなふ、その書庫の中にてたまたま山内義雄*に逢ふ、じつに十数年ぶりなり、また河盛好蔵に逢ひともに銀座に出て吉田にて小酌　夕五時より歌舞伎座にて文藝春秋三十年記念祭を観る、佐藤美子に逢ふ、帰途川端康成に逢ひふたゝび吉田にて小酌

* Lucien Laurat　リュシアン・ローラ。本名オットー・マシユル。オーストリアの作家、マルクス主義者

* 山内義雄　フランス文学者

○三月三十日（日）晴。神田古書会館に琳琅閣古書売立の下見におもむく、ほとんど見るべきもの無し、帰途連雀町やぶそばにて少酌

○四月一日（火）くもり小雨、夕方東京温泉に浴し吉田にて小酌をこころみたるに今日出海来、すなはちともにマンハッタン、ルーベンス、若竹とのみあるく、帰途深更におよんで徳田雅彦丸岡明*英国人スコットといふものを伴ひて訪れ来る、これを濱田につれ行きて歓談す

* 丸岡明　小説家

○四月二日（水）曇小雨、寒し、神田村口におもむきて蜀山手写水戸義公行実*二冊を購ふ、帰途若竹にて少酌

* 水戸義公行実　徳川光圀の正伝

○四月四日（金）晴。早朝井澤義雄御影より上京し来る、白鶴一升蒲鉾一籠を贈らる、夕方町をあるき若竹にて小酌、若竹所在の地をさくら小路と命名す、けだし烏森神社は古く桜田社なるに因めるなり、留守中沢渡未亡人山形より訪ね来りビスケット一缶所贈

○四月五日（土）晴。昼ブリヂストン美術館におもむきて画を観る。帰途銀座ビルゼンにてビールをのみて帰宅、井澤義雄雑誌現在*発刊の相談会に出席して帰来　その会合のやうすを報告す、安部公房弁論大いにつとめたるよし

* 現在　同年6月発刊の文芸誌（発行元…書肆ユリイカ）現在の会、発売元…月曜書房

○四月六日（日）晴、あたゝかなり、島尾敏雄来話、島尾とともに井澤浅草に行く、ストリップを見物したるよし

○四月七日（月）晴。夜来小説他人の自由の稟をついで曉に成る、五十七枚、別冊文藝春秋に寄せむがためなり、ことし小説を草したるはこれを以てはじめとす　午後文藝春秋社に草稟をわたし吉田におもむきて吉田健一と小酌、井澤義雄現在の会に出席したるに発刊の議はまだまとまらずといふ

上段…他人の自由　五十七枚

○四月八日（火）晴、井澤義雄神戸にかへる、新宿紀伊国屋におもむきて本を購ふ。Gabriel Marcel* : Journal métaphysique , Albert Camus : L'homme révolté, Paul Valéry : Degas Danse Dessin, René Clair* : Réflexion faite. 帰途吉田にて小酌、また若竹におもむく、梅茶屋主人*二好達治に逢ふ

* Gabriel Marcel　ガブリエル・マルセル。フランスの哲学者、劇作家

* René Clair　ルネ・クレール。フランスの映画監督

* 梅茶屋主人　美術評論家、古美術収集家の秦秀雄

○四月九日（水）晴。夕東京温泉に浴しビルゼンにてビールをのみ　東京画廊に佐藤敬の展覧会を観る、敬美子富永惣一*と吉田にて小酌、帰途マンハッタンにて島中鵬二今日出海と会してのむ、エスポアルに立寄りて帰る甚だ酔ふ　酣中歌仙表六句をえたり

* 富永惣一　美術史家、美術評論家

○四月十日（木）くもり、夕吉田にて今日出海と逢ひマンハッタン及若竹に転じてのむ　帰途エスポアルに立寄る

○四月十一日（金）くもり、海老名雄二来話、東海汽船に復職するよし、

夜東京画廊にて佐藤美子佐藤敬に逢ひ大和田及エスポアルにて少酌

○四月十四日（火）*雨。夕東京温泉に浴し若竹におもむくに白州正子*青山二郎すでにあり　青山及壺中居主人に誘はれて築地北原武夫宅におもむきて麻雀をもてあそぶ　麻雀はじつに十数年ぶりなり

* この年の四月十四日は月曜なので、日付が曜日かのどちらかが誤記と思われる

* 白州正子　白洲正子。随筆家

○四月十六日（水）晴。午刻安部公房来話、安部とともに東中野モナミにおもむきて野間宏真空地帯出版記念会に列す　帰途安部及岡本太郎と新宿をのみあるき某バーにてストリップを観る

○四月十八日（金）晴。夜来「歌仙」の稟を書きつぎて曉に成る、二十九枚、但上

くれないの花には季無し枕もと

まだきに起きて初霜を履む

くもり日の枝に残れる柿いくつ

またのみ直すどぶろくの酔

失せものをたづぬる方に月あはし

ひとの苦勞を茶はなしにする

むつかしや梅にも露は置くものを

木の芽どきにはつのる癪癖

ネクタイのサーモンピンク春浅し

蝶飛びかふは誰か家の窓

うすものに透きたる肌は夢ならじ

かぶりつきには利いた顔なり

つれなくも木戸に入るさの月の影

虫の音聴いてかへる横町

やや寒のなま物識と笑はれて

客を迎へて酒徳孤ならず

わが宿は隣の花のさかりにて

春追ふ旅のわらんじを編む

つづく

右群像川島勝の来れるに与ふ、河出書房竹田博来話、ともに銀座よし

田にて小酌　それよりひとり数軒に転じ深更帰

上段…歌仙上　二十九枚

○四月二十日（日）晴、風強し、終日家居、山川朝子のために色紙を書く　別れ来てなほ目にしみる若葉かな

○四月二十三日（水）晴。夕窪田啓作鈴木貢を銀座吉田に招きて加藤周一の原稟のことにつきて話す、昨日パリなる加藤より航空郵便にて文学界に寄稟すべきことをいひ寄こしたればなり、窪田を伴ひて帰宅スキヤキを食ふ、たま／＼伊藤濱子来り会す

○四月二十七日（日）晴。山田有勝、三木偵、今官一*来話、酒を贈らる、ともにのむ

* 今官一　小説家

○四月二十八日（月）晴。夜来フィルムあれこれ二十三枚を早し曉に成る、安部公房来話、安部二名の紳士を伴ひ来りてとゞ語る、夜鈴木貢と新宿にのむ、紀伊国やにて L'heure de choixをあがなふ

上段…フィルムあれこれ　二十三枚

○四月二十九日（火）曇、夜日比谷公会堂に Helén Traubel* のソロを聴く、帰途若竹にて小酌

* Helen Traubel　ヘレン・トローベル。アメリカのオペラ歌手。ソプラノ

○四月三十日（水）晴。夜少雨、昼東宝試写室にてイギリス写真『The life and death of Colonel Blimp』を見る、帰途吉田にて小酌、留守中新潮社大田美和来 夷齋筆談見本十部届け来る

* The life and death of Colonel Blimp 『老兵は死なず』マイケル・パウエル、エメリック・プレスバ―ガー監督

○五月二日（金）晴。昨日のメーデーは一部暴動化せりと伝ふ。大田美和来、夷齋筆談二部届けらる、この本は発売とともに板元にては売切のよし、大田と吉田にて小酌、吉田健一に逢ふ。

○五月六日（火）晴。本多秋五*来話。埴谷雄高の病氣見舞のため二千円わたす、安部公房草月流の佐藤某女をともしひて来話、安部佐藤をつれて銀座ビルゼン及吉田にて小酌、のち徳田雅彦に逢ひマンハッタンエスポアル小笹すしにてのむ 徳田濱田に泊

* 本多秋五 文芸評論家

○五月七日（水）晴、夕日本橋すし春にて小酌、これは壺中居がひらきたる新店也、すし春のかつをのたゝき衣更 の句を色紙に書く

○五月八日（木）晴。二本榎上行寺に榎本其角*その父東順、桂川氏、大橋氏*の墓を見る、其角は榎本氏と伝へらるれども東順の墓には榎下とあり いづれに従ふべきにや 町をあるきて疲れたり

* 榎本其角 宝井其角。江戸中期の俳人。その父・竹下東順は医師

* 桂川氏、大橋氏の墓 蘭学者・桂川甫周並びに桂川家、将棋名人・大橋宗桂並びに大橋家の墓

○五月十一日（日）晴。銀座ビルゼンにて岡本太郎の会に列す、帰途コーヒ―店アンブルにて三島由紀夫に逢ふ、帰来パリなる加藤周一に送るため書を裁す、三島は昨朝ヨーロッパより帰れる也、加藤宛書簡の末に一句 さみだれの晴間を保つのちかな しばらくしてこれを改め

て たをやめの馬車に乗り行く若葉かなとす パリの空の下にセーヌは流れるといカツドー写真を見たるとき詠めるなり

○五月十三日（火）晴。本郷大学赤門内文学士会館談話室に近代文学同人と会して近代文学への寄附金ならびにて埴谷雄高病氣見舞金を手交す 帰途連雀町やぶそばにて小酌

○五月十四日（水）晴。夜文学座公演を三越劇場に観る、出し物は堀田善衛原作祖国喪失也、帰途河盛好藏と日本橋すし春にてのむ、青山二郎に逢ふ 宇野千代来り会し築地宇野邸におもむきて泊る

○五月十五日（金）*晴。週刊朝日黒川来話、写真をうつさる、夷齋筆談の書評に使ふよしなり、柳原徳子来話、山川朝子来話、朝子とともに銀座におもむきて吉田にて小酌、朝子に夷齋筆談を贈る

* この年の五月十五日は木曜なので、日付か曜日どちらかが誤記と思われる

○五月十七日（日）*晴。昨夜伊皿子志保原にして三島由紀夫の歓迎会に列す 前後不覚に酔ふ、今日さきごろより書きつづけたる歌仙続壺三十枚を脱藁す 右後半の十八句左のごとし

飛行機の影より霞みわたりけり
ほのかに低し先哲の墓
つづめたる思想は思想に非ずかし
雲の中なる神霊は何

五月朔明けなば旗の揚がるらむ
女まじりに押出す勢

水清し地は解放を名に負ひて
稲穂の波に歌のたかまる
草花をかざしに挿してをどる輪に
雁のたよりの一人を欠く

山東の郷談月にころよく
手妻のたねも売れる祭礼
国越の峠なかばにしぐれけり

はきならしたる海軍の靴

穴子ずしまた染めかへす暖簾にて

初雷の江戸の青空

花吹雪橋には獅子の舞ひつれて

善隣を訪ふ船の春風

春はめぐる船旅

上段…歌仙 承前 三十枚

* この年の五月十七日は土曜なので、日付か曜日どちらかが誤記と思われる

○五月二十二日（木）晴。文藝春秋招待にて鈴木貢とともに蔵前角力小屋におもむきて夏場所十二日目を見る。角力見物じつに久しぶり也、吉葉山栃錦よき角力取なり、帰途深川宮川にて小酌してかへる。留守中窪田啓作安部公房来れるよし、窪田はその訳著エリユール詩集をまた安部はその書下し原藁を置いて去れり

* 吉葉山栃錦 吉葉山はのちの第43代横綱、栃錦はのちの第44代横綱

○五月二十七日（火）雨、河出書房竹田博来話、新宿紀伊国屋におもむきてフランス書七冊をあがなふ、帰途秋田にて小酌、また銀座吉田に転じてのむ、パリなる加藤周一より来信

○五月三十日（金）小雨、日活会館六階にて川端康成ほか五名の会に列す、この建物新築なれども小ぎたなきもの也 帰途日本ばしすし春にて会のくづれの多勢にて小酌閑談

○六月二日（月）小雨、後晴曇相交はる、白水社泉州某来話 山内義雄訳窄き門*の新版を出すにつきその新潮社刊の初板に付したる余の跋

を再録せんことを乞ふ おもへば余がこの跋文を撰したるは関東大地震の年の五月に係る、すでに三十年のむかし也 余かかる若年の述作

をふたゝび出すことを好まざれども山内との旧誼をおもひこれを承諾す、但原形のまゝにて一字一句をも改めず、山内にはがきを書き句を添へてやる さみたれやふと見つけたる古日記

* 窄き門 アンドレ・ジイド著、山内義雄訳。一九二三年、新潮社刊

○六月三日（火）くもり、夜来エセエの藁を書きつぎて今朝成る、ニヒルと政治二十八枚 これを文学界にわたす 鈴木貢とコックドールにて小酌 窪田啓作に逢ふ これを家にともしひ帰りて閑談

上段…ニヒルと政治 二十八枚

○六月五日（木）晴。鎌倉におもむきて美術館にて古陶展を観る、それより錦屏山瑞泉寺に詣る、さらに由井浜におもむき帰途駅前ボルドーにてひとり小酌 瑞泉寺にて 青梅の青きかなたに日晴れたり

○六月六日（金）晴。夕深川高橋におもむきてとぜう屋にてひとり小酌 この店旧に依つてよし 帰途銀座にてよねのために空也の最中を買ふ ○六月八日（日）雨、すでに梅雨の配置也、大内則子来、小説草藁を示したるを批評して返す、夜浅草におもむきて飯田屋にて小酌、合羽橋通のどぜう屋なり これを高橋に比すれば品落ちたり

○六月十日（火）陰晴定まらず。夕神田村口におもむきて松浦竹四郎蝦夷日記*ほか数冊の本を註文しおく、昨日吉川幸次郎より来信 読書新聞に夷齋筆談の評を寄せたる旨知らせありたれば神田通にてその新聞を購入してキャンドルに小憩してこれを覽る、帰途銀座吉田にて小酌、夜 Alan : Lettres sur la philosophie de Kant*を読む、小冊なれどもはなはだ有益の書なり

* 蝦夷日記 幕末明治期の探検家・松浦武四郎の著作。「夷齋清言」参照

* Lettres sur la philosophie de Kant おそらへ正式タイトル “Lettres à Sergio

Sohni sur la philosophie de Kant” G.rrr

○六月十二日（木）晴。小山清来話。その編纂するところの「太宰治の手紙」を贈らる。小山妻を迎へたるよし

○六月十三日（金）晴。文藝春秋クラブに入会す、富士見町近江やにて角川源義と語る、帰途日本橋鮎佐にてうなぎの佃煮を購ふ

○六月十四日（土）曇夜に入つて小雨、安部公房来話、ともに春日町火の車におもむきて小酌、これ草野心平いとなむところの酒場也、火の車涼しきほどに廻りけり

○六月十六日（月）曇。夜来乞食王子十三枚を草す 山川朝子の来れるにこれを与ふ、朝子と日本橋すし春にて小酌 昨日信州追分より堀辰雄病中寸楮を裁して寄せ来る これに応へて句あり

葉桜や年々かはる池のさま
葉桜や埃しづまる雨のあし

上段…乞食王子 十三枚

○六月十七日（火）晴。神田村口におもむきて蝦夷日誌十七冊崎人十篇、鉄斎図入をあがなふ、夕三越劇場にて俳優座公演福田恆存作現代の英雄を観る、帰途文藝春秋クラブにて小酌 この日クラブ開場初日也

* 崎人十篇 中国明代のイエズス会宣教師マテオ・リッチ（利瑪竇）の著作。鉄斎図入とあるので江戸寛政期に伴蒿蹊が著した『近世崎人伝』『続近世崎人伝』

とも考えられるが、「崎人」（『夷齋清言』）には鉄斎旧蔵書とある

○六月二十四日（火）今晩台風九州を過ぎ夜来の雨午後に至つて已む、東京新聞社頼尊国隆写真師を伴ひて来り写真インターヴィュといふものを求めらる、しばらく閑談す

○六月二十五日（水）曇、菅原国隆来話、原稟依頼されたれども確約せ

ず、夜文学界に寄せるためにエセエ革命とは何か二十八枚脱稟、エセエの政治談にわたるものはこれにて打切とし来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり

上段…革命とは何か 二十八枚

○六月二十七日（金）晴曇さだめがたく夜に入つて驟雨あり、中野重治より近著鷗外その側面を贈らる 河出書房竹田博来話、夕文春クラブにおもむきて谷崎終平と将棊をさす それより日本橋すし春に行く、中野好夫中村光夫と逢ふ

○六月二十八日（土）晴、谷川俊太郎*より詩集二十億光年の孤独を贈らる

* 谷川俊太郎 詩人

○七月三日（水）晴。昨夜川島勝の迎へに依りて佐藤美子を鶴見のその家に訪ひ小宴を設けらる、つひに泊る、八木義徳来り会す、今日夕刻読売新聞社員来りて写真をうつさる

○七月七日（月）晴。午後文春サロンにおもむき出版部安藤直正に夷齋俚言原稟四百五十枚を手交す これを梓行せしめんがため也 久保田万太郎夫妻に逢ふ

○七月八日（火）晴。安部公房来話。閑談夕刻におよびともに文藝春秋クラブにおもむく。永井龍夫と将棋をさす。

○七月十二日（土）晴。夕文春クラブにて林達夫*に逢ふ。マンハッタンにて朝吹三吉*に逢ふ。

* 林達夫 思想家、評論家

* 朝吹三吉 フランス文学者

○七月十五日（火）晴。午後新宿紀伊国屋におもむきフランスの本を購ふ、* Paul Valéry : Ecrits divers sur Stéphane Mallarmé, Armand Hoog*

: Littérature en Silésie. 夜文春クラブにて井伏鱒二河盛好蔵に逢ひと

もにすし春におもむきて小酌 小林秀雄よりその著ゴッホの手紙を贈らる はがきに句を書きて遣る、ひらくよりにほふ紙の香青嵐

* Armand Hoog アルマン・ホーグ。フランスの作家、文芸評論家

○七月十九日（土）小雨をりをり晴。芝本善彦*来話、染付の水滴を贈らる、芝本とともに文春クラブ及すし春にてのむ、帰途銀座の某バーに立寄り女どもに送られて帰宅、はなはだ酔ふ 芝本宿酔の薬ありと
* Alka-Seltzer*を買ひ来る

* 芝本善彦 「文学界」編集者

* Alka-Seltzer アルカセルツァー（解熱鎮痛剤）

○七月二十一日（月）晴。山川朝子来話。ともに文春クラブにおもむく。夜日比谷公会堂にて貝谷八百子*のバレエを観る。展覧会の絵、三角帽子

* 貝谷八百子 バレエダンサー

○七月二十四日（木）晴。午後白水社瀬尾正明来話、山内義雄使として窄き門並にコニヤック二本届け来る、日本文化放送NCB水野繁及北田正武来話 講演放送依頼也、山内にはがきに句を書きて遣る、めぐり来て二十九年の涼しさよ 註 新板窄き門は初板の時より二十九年目にて初板に寄せたる余が跋文もここに再び割剱に附されたり

○七月二十五日（金）晴。夜NCBの迎へに依りてその社の録音室におもむきはじめて放送をぶつ、講演といふこともまた初めて也、漫然たる随想を語る。

○七月二十六日（土）晴。NCBより薄謝を受く。菅原国隆来話。夕文春サロン*におもむき三好達治に逢ひとにすし春に行きて小酌、帰途三好を車にてわが家の門前まで伴なひこれに萩原朔太郎*の色紙を

贈る。

* 文春サロン 文藝春秋クラブのことか。以降、この表記続く

* 萩原朔太郎 詩人

○七月二十八日（月）晴。山川朝子来話、文芸に鷗外の追儼を載せるよしにてその解説原稟一枚を書きてわたす、朝子と文春サロンにおもむく、今日出海に逢ひとともに銀座をのみあるく

○七月三十一日（木）曇。夜来松浦竹四郎が蝦夷日誌につきて二十五枚草す 夷齋清言一として文学界に寄せんがためなり、この夜乱酔上段…蝦夷日誌 二十五枚 夷齋清言一

○八月五日（火）晴。福永武彦より来信その書下し長編風土の板成れることを告ぐ、午後日本橋高島屋にて東大寺展覧会を観る、また丸善におもむきてn r f*のジイド記念号をあがなふ、帰途文春サロンにて小酌

* n r f フランスの文芸誌「新フランス評論」(La Nouvelle Revue Française)。

ほかにNREの表記あり

○八月八日（金）晴。社会タイムス記者藤池雅子来話 菅原国隆来話。夜窪田啓作来話、その訳著 noes (Camus) とローマイヤのシートバイを贈らる、福永武彦に風土読後感を書きて遣る

○八月十三日（水）晴。午後安部公房来話、新宿紀伊国屋におもむき
* François Mauriac* : Mes grands hommes, Paul Valéry : Mauvaises pensées & dâutres を購ふ。帰途文春サロンにて小酌

* François Mauriac フランソワ・モーリアック。フランスの小説家、文芸評論家

○八月十八日（月）晴。むし暑し。深更におよび先日より書きつづけたる狂歌百鬼夜狂二十八枚脱稟、文学界十月号に寄せんがため也
上段…狂歌百鬼夜狂 二十八枚 夷齋清言二

○八月二十日（水）晴。酷暑ほとんど食欲をうしなふ 夜千駄ヶ谷梅茶屋にて小林秀雄と対談す 群像十月号の企画なり 余対談の席に出づること戦後はじめて也

○八月二十一日（木）晴。午後松竹試写室にてチャブリン Monsieur Verdoux*を観る。林達夫に逢ふ、ともに文春クラブにて小酌

* Monsieur Verdoux 『殺人狂時代』 チャールズ・チャップリン監督のアメリカ映画

○九月七日（日）曇。暑さやうやくうすらぐ。小山清来話、これに伴ひて今戸におもむき真宗称福寺に松浦竹四郎の墓をたづねたるに松浦氏の墓は先年すでに無縁にて湮滅せりと寺僧咄、なほこの寺には亀田鵬斎*墓あり、称福寺を出でゝ橋場長昌寺を訪ふ、法華也、鐘楼に銅鐘あり、享保七年庚子神田錫町小幡内匠作とあり、帰途向島三めぐり社および長命寺におもむく 長命寺にてさくら餅を小山に供す、それより鳩の町のあたりをあるき雷門にもどりて並木やぶそばにて小酌

* 亀田鵬斎 江戸後期の儒学者、文人

○九月九日（火）曇小雨、朝林達夫二男果之介来話、鶴沼の土地を林に贈与す、山川朝子安部公房来話、ともに文春クラブにおもむきて小酌、文学界の需めに依りて近藤日出造*と逢ふ 漫画を描かしむるがためなり

* 近藤日出造 漫画家

○九月十一日（木）晴ときぐ曇、午後銀座はせ川にて写真をうつす、撮影土門拳*、山川朝子のために文藝に載せんがため也 帰途文春クラブおよびすし春にて小酌

* 土門拳 写真家

○九月十六日（火）曇小雨、午後田村町兼坂ビルにてアメリカ写真セー

ルスマンの死*を観る。帰途烏森若竹の直の急逝を聞きその店におもむきて弔問す、河盛好藏と文春クラブにて小酌

* セールスマンの死 ラズロ・ベネディク監督

○九月十八日（木）晴。窪田啓作妻大磯より来話、黒鯛一尾を贈らる、夜銀座よし田にて小酌

○九月廿日（土）彼岸入、くもり小雨、上野博物館にしてブラック*展覧会を観る 藤川栄子に逢ふ、帰途文春クラブにて少酌

* ブラック ジョルジュ・ブラック。フランスの画家

○九月二十四日（水）晴。夜アルプスの少女十四枚書く 山川朝子のために文藝十一月号に寄せんとす

上段：アルプスの少女 十四枚

○九月二十五日（木）晴。山川朝子来話、アルプスの少女の草藁をわたす ともに文春クラブにおもむく 朝日新聞に五十嵐清江を訪ひてコルトー*の切符四枚の代金を支払ふ、けふコルトー飛行機にて来朝せるよし也

* コルトー Alfred Cortot アルフレッド・コルトー。ピアニスト

○九月二十六日（金）晴ときどき雨、午後一時より日本文化放送にて講演す 来月中の水曜は五回連続にてその一と二とを録音す 仮題虚構と感覚、筑摩書房主人古田晁留守に高輪に来りそれより文化放送まで追ひ来る 叢書出版につき話を聴く、帰途神田村口にて鉄斎の画帖を観る、文春クラブに小憩して帰る

○九月二十七日（土）晴、夜来崎人二十八枚を草す、夷齋清言三也 これを文学界にわたす 川端康成より来信 石濤の画巻についての消息也

上段：崎人二十八枚 夷齋清言三

○九月二十八日（日）くもり夜小雨、文化放送水野来話 アベ某女を伴ひ来る、夕新宿紀伊国屋にてフランス書を購ふ François Mauriac : Le romancier et ses personnages, J-P.Sartre : L'Imagination.

○十月一日（水）晴。午後神田村口にて太田南畝手写本四冊（南朝紹運図*統神皇正統記*嵯峨野物語*西園寺鷹百首*応永記*長祿記*）及寛永板草人木*三冊を購ふ 夜帝劇にてAlfred Cortot のピアノ演奏を聴く 川端康成に逢ふ 帰途佐藤美子徳田雅彦とすし春及エスボールにて少酌

* 南朝紹運図 後醍醐天皇の皇子から南朝の皇統系図

* 統神皇正統記 室町後期の小槻晴富による史論書。北畠親房の『神皇正統記』の続編の体裁を採りながら、同書は批判する目的で書かれた

* 嵯峨野物語 歌人で南北朝時代に摂政・関白・太政大臣を務めた二条良基の著とされている

* 鷹百首 鷹狩にまつわる歌を集めたもの室町後期、西園寺公経の詠歌とされる

* 応永記 応永の乱について書かれた軍記物。15世紀初には記されたとされる

* 長祿記 室町期の長祿年間について記した軍記物

* 草人木 江戸初期に出た最初の刊本による茶書。「ワビ」（『夷齋清言』）参照

○十月二日（木）晴。夜帝劇にてCortotを聴く、帰途佐藤美子徳田雅彦と帝国ホテルバー吉田そばや及びルビコンにて小酌 有楽町アマンドにてよねにケーキを買ひてかへる

○十月七日（火）晴後曇、朝井澤義雄神戸より来、松茸サハラ白味噌漬及ウイスキーを贈らる 昼NHK所員某来、鵬外についての放送を依頼さる 夜日比谷公会堂にっし Gala de ballet de Serge Lifar* avec Liane Daydé*を観る 帰途小雨 銀座よし田にて小酌 川端康成夫人及娘に逢ふ 井澤泊、夜小雨

* Serge Lifar Liane Daydé リファール、ダイデはともにバリ・オペラ座バレエ団で活躍したバレエダンサー

○十月八日（水）曇小雨、河出書房竹田博来話、印税（小説大系普賢）の一部を持参す、島尾敏雄来、ちかごろ肺を病めるよし、島尾と井澤とを伴ひて文春クラブにて小酌、井澤泊

○十月九日（木）晴、筑摩書房古田晁来話、夜窪田啓作来話、加藤周一のイタリアに遊べるよしを聴く

○十月十日（金）晴。加藤周一に飛行便にて尺牘を遣る 新宿紀伊国やにっし Roger Martin du Gard* : Notes sur André Gide, Paul Valéry : Lettres à quelques-uns を購ふ、帰途文春クラブにて小酌、井澤辞去す

* Roger Martin du Gard ロジェ・マルタン・デュ・ガール。フランスの小説家 賞第三回をこころむ

○十月十四日（火）晴。午後二時よりNHKにおもむきて鵬外ちいさんばあさんにつき八分間録音放送す 夜蜘蛛三十枚草し畢る、別冊文藝春秋に寄せむがため也

上段：蜘蛛 三十枚

○十月十五日（水）くもり後雨、蜘蛛草藁を別冊文藝春秋にわたす 夕松竹本社にて伊太利亜活動写真デ・シイカ作ミラノの奇蹟を観る この日夷齋俚言刊行

○十月十七日（金）晴。ブーチャン映画を観る、夜佐々木基一來話、ビスキをのむ

○十月十九日（日）晴。午後文化放送にて虚構と感覚第四回及第五回をぶつ、夜八十岡英治来話 将基をさす

○十月二十一日(火)晴。安部公房菅原国隆来話 安部と銀座におもむき吉田にて小酌

○十月廿五日(土)くもり、辻マコト*来話 図書新聞の囁に依り余の似顔をかきに来れる也、これ初見の人辻潤の遺児也といふ、しばらく往時を語る、ウラテツ*の死せるを聞く、堀口大学より新潮文庫板堀口大学詩集を贈らる、はがきに札をかきて遣る、「十月の言葉」をここに草の色

*辻マコト 辻まこと。画家・詩人

*ウラテツ 辻潤の高弟といわれた卜部哲次郎のことか

○十月廿八日(火)くもり 徹夜ワビ二十七枚脱稟 此夜文春クラブにて美子レサリイタルあり 帰途エスポアルにて小宴(二十七日安藤更生*来話)

上段…ワビ 夷齋清言四 二十七枚

*安藤更生 美術史家

○十月二十九日(水)くもり後雨。夕文春クラブにて檀一雄に逢ひともにブルーバードにおもむきまた草野心平の酒場に転じさらに双葉荘にてふぐ料理の宴に終る 檀胃を病むといふ 町にてカバンを購ふ

○十月三十日(木)くもり、三笠書房山口年臣来話 赤い百合訳書を三笠文庫より刊行することをいふ

○十月三十一日(金)くもり後雨、夕銀座よし田にて小酌 夜 Roger Martin du Gard : Notes sur André Gide 読了。ジイドとコンミニスムについて記したところおもしろし(100)ジイドはおそらく高齢にはいさゝかの盲目的行動ありてもさして配慮すべきにあらずと考へたるものゝ如し

○十一月一日(土)晴、風つよし、終日家居、夜大田南畝手写本嵯峨野

ものがたり白鷹記*、鷹百首を読む、この本さしたるものに非ず 鷹は一連犬は一牙をもつて呼ぶことを知れるのみ

*白鷹記『鷹百首』同様の鷹狩に関する文獻。十月一日の註参照

○十二月二日(日)晴やゝ寒し終日家居、南畝手写本長祿記応永記を読む 金閣銀閣建立の世に私闘の殺戮絶えず 政争のごときものかその規模の小なること生活の貧困を語るに似たり

○十一月六日(木)晴。台風南海を過ぎ温きこと冬の近きことを忘れしむ 夜文春サロンにて牛臓物料理の会あり 会するもの久保田万太郎

辰野隆*高峰秀子*ら盛会也

*辰野隆 フランス文学者

*高峰秀子 俳優

○十一月八日(土)晴。夕猿町般若苑にして文学祭の園遊会におもむく

○十一月九日(日)晴。池田生子の新宅におもむきて入浴す

○十一月十一日(火)晴。新潮社より背徳者(文庫本)印税を送り来る、村口書房にて寛永写本抛入聞書*を購ふ 夜三越劇場にて福田恆存の芝居を観る、三越食堂にてはじめて越路吹雪に逢ふ、帰途徳田雅彦とエスポアルにて小酌

*抛入聞書 抛入とは桃山時代に生まれた生け花(抛入花)のこと。「花」(『夷齋清言』)参照

○十一月十二日(水)曇後雨、夕日比谷公会堂にてコルトのレサイタルを聴く、フランク、フォーレ、ラヴェル、ドビュッシー、帰途よね菅原国隆大田美和をたづさへて文春サロンにて小酌、会場にて山内義雄に逢ふ

○十一月十三日(木)晴。寒風にはかに至つて巷は冬されのけしきとなる、夜窪田啓作来話

○十一月十四日(金)晴。文藝春秋社にして鷺尾洋三より余の小照を贈らる すし春にして三好達治より亀田鵬斎の書幅を贈らる 烟霞堆裏

發高興*一行書也

*發高興「三好達治」(『夷齋小識』所収)では「烟花堆裏發高興」と記されてゐる

○十一月十七日(月)晴。あたゝかし、午後中央公論画廊にて高村光太郎*の小品展を観る、島中鵬二中山義秀に逢ふ、それより新宿紀伊国やにおもむきて書をあがなふ Pierre de Boisdeffre* : Métamorphose de la littérature, 2 volumes, Henry Miller* : Printemps noir, (traduit de l'anglais par Paul Rivet) 帰途ととやに立寄りたるに井伏鱒二の来れるに逢ひ乱酔

*高村光太郎 彫刻家、画家、詩人

*Pierre de Boisdeffre ビエール・ド・ボワデフル。フランスの外交官、小説家、評論家

*Henry Miller ヘンリー・ミラー。アメリカの小説家

○十一月十九日(水)晴。堀口大学より其著月下の一群(白水社板)を贈らる

○十一月二十日(木)晴。安部公房来話。夜帝国劇場にて文藝春秋祭におもむく 小林秀雄に逢ふ

○十一月廿一日(金)雨、夜一ツ橋如水会館にて勅使河原蒼風の招宴におもむく 岡本太郎に逢ふ 岡本は明日パリに出発するよし

○十一月廿二日(土)晴、川島勝来話 濱田女主人来 山川朝子来 夕山川とゝもに神田におもむきたるに駿河台にて安部公房に逢ふ 帰途文春サロンにて小酌

○十一月廿四日(月)雨、講談社の使の来れるに小説鷹前半の原稟五十

枚をわたす、終日家居

上段…鷹五十枚 前半

○十一月二十八日(金)曇。去廿六日よりモミヂに泊りて文学界のために花二十四枚を草す 夜すし春にて少酌

上段…花 二十四枚 夷齋清言五

○十一月二十九日(土)晴。よし来話、文春クラブにおもむく、松坂やにて草月流展を観る、蒼風および土門拳に逢ふ 帰途よし田マンハッタンにて少酌

○十二月一日(月)晴。神田村口におもむきて三部の書をあがなふ、古今堪忍記*七冊、女鏡秘伝書*三冊 龍宝山大徳禪寺世譜*一冊、帰途文春クラブにて小酌

*古今堪忍記 七冊本の『古今堪忍記』は江戸中期の俳人・浮世草子作者の白梅園(青木)鷺水の著書と推定。堪忍記とは堪忍を人間生活の基調をなすものとして、和漢古今の逸話や巷説を挙げて教訓を記したもの

*女鏡秘伝書 江戸初期、女性のたしなみについて書かれた書物。「髪」(『夷齋清言』)参照

*龍宝山大徳禪寺世譜 京の臨済宗大徳寺派総本山大徳寺開山からの歴代住持の詳細及び崇福寺・真珠庵・酬恩庵の住持の詳細、幕末に出版

○十二月五日(金)晴。室を掃除して畳に莫塵を敷く。古書の埃をはらつて座右いさゝか綺麗になりたるがごとく錯覚す、文春クラブの奥沢バーテン豆腐をもちて来る、夕斯波武来、晚餐とともにす、夜南郭先生燈下書*を読む、作詩作文の法を論じてところゝ聴くべきの言あり、僻韻險句を忌むべしといへるは詩にあつてはまさに然らむ 散文にては必ずしも深く忌むべからざるにや

*南郭先生燈下書 江戸中期の儒者・漢詩人・文人画家、服部南郭の著作

○十二月八日(月)晴。よねを伴ひて文春クラブにかき料理をくふ。夜芝本善彦案内にて日比谷公会堂にして東京交響楽団のメンデルスゾーン、エリヤを聴く、帰途よし田にて小酌

○十二月九日(火)初雪。夕銀座の髪床におもむきたるに街頭にて山内義雄に逢ふ、すなはちともに酒をくみ深更まで数軒をのみあるく 同行数輩 このところ酒に疲れたり

○十二月十一日(木)晴。安部公房来その著闖入者の成れるを持参す、はせ川女主人来ふろしきと蒲鉾とを贈らる 歳暮挨拶也 安部をともなひて文春クラブにて少酌

○十二月十二日(金)晴。山岸外史[＊]来話 竹田博来話、夜文春クラブにて山内義雄と逢ふ とともにブルニエ、エスポアル、アムール、アカンサスにおもむきて酒くむ、同行中野好夫徳田雅彦鈴木貢

[＊] 山岸外史 評論家

○十二月十四日(日)晴。昨日文藝春秋忘年会にて熱海(伊豆山)樋口旅館におもむきて今日帰る 一行百数十名 福引にてホワイトシヤツあたる、干魚のみやげをもらふ

○十二月十九日(金)晴 タリツツにして中村真一郎五部作[＊]出版記念会に列す それより文春クラブにて山くじらの宴におもむく

席上詠

五段目 山くしらゆかり深間の牡丹花

のいろにはそれる二ツ玉かな

湯に酒の吉奈諱山くじらかな

註 当夜の猪は伊豆吉奈温泉(東府や)よりの寄贈也

上段…山くしら味噌煮の法

野菜 ねぎ 大根厚くそぐべし 牛蒡同前

コンニヤク手でひねるべし 焼豆腐 大切
味をこくすべし(醬油砂糖)

猪の毛の長きは味悪し

みぢかきがよし

○十二月二十日(土)晴。夜来珍珠船二十四枚を草し文学界にわたす、午後窪田啓作に逢ひ新宿紀伊国やにおもむく 原田義人[＊]に逢ふ、窪田銀座にて中華料理を饗す

上段…珍珠船 夷齋清言六 二十四枚

[＊] 原田義人 ドイツ文学者、翻訳家

○十二月二十二日(月)晴。新宿紀伊国やにてフランス書を購入ふ。

¹⁴⁾ E tiemble^{*} : Hygiène des Lettres lères notions, Max Brod^{*} : Franz Kafka. 夜第一生命館にて近衛楽団^{*}の演奏を聴く Haydn : Le Reine, R. Strauss : Bourgeois Gentilhomme. 帰途徳田雅彦とはせ川マンハッタンにて小酌 マンハッタンにてはじめて永井荷風に逢ふ

^{*} E tiemble ルネ・エチャンプル。フランスの小説家、比較文学者

^{*} Max Brod マックス・ブロート。オーストリアの評論家、作曲家。カフカの友人、紹介者として著名

^{*} 近衛楽団 近衛管弦楽団のことか

○十二月二十三日(火)晴。筑摩書房に検印をわたす なんとか叢書の一なり 七千部

○十二月二十四日(水)晴。神田村口にて貫休詩集^{*}二冊をあがなふ 富岡鉄斎旧蔵也、夜文春クラブにてクリスマス宴あり はじめて獅子文六^{*}に逢ふ

^{*} 貫休詩集 貫休は中国唐末五代の禅僧。画、詩、書に優れる

^{*} 獅子文六 小説家。本名の岩田豊雄では演出など演劇で活躍

○十二月二十六日(金)晴。寒し。午後東和商事試写室にて Fanfan la Tulipe^{*}を観る、佐藤美子に逢ふ、昨夜美子と銀座にてクリスマス的小宴を催し泥酔せる あとにて美子今夜は所用あり匆々に別る、帰途文春クラブに小憩 ビスキ一本をあがなふ 正月用のつもり也

^{*} Fanfan la Tulipe 『花咲ける騎士道』クリスチャン・ジャック監督のフランス映画

○昨夜小林秀雄今日出海西欧におもむくを送る会あり、銀座鶴の家

○十二月三十日(火)晴。昨夜銀座にて山内義雄と会飲し今朝昏酣たり午後平凡社に佐々木基一二子来話 とともに銀座よし田におもむきて小酌 帰途文春クラブにて玉川一郎^{*}に逢ふ 一昨年はせ川にてはじめて逢ひたるとき余これをのしつて泥棒と呼んだるよし玉川咄なり泥棒とはわれながら天晴なる言を吐いたるものかなとて大笑を発す

^{*} 玉川一郎 作家

○十二月卅一日(水 晴)夕東京温泉に浴す はせ川にて河盛好蔵に逢ふ、なんとかいふバーにおもむく よし田にて勅使河原蒼風に逢ふ なんとかいふナイトクラブにおもむく 深更帰宅 うちにてよし田の(よねと)そばを食ふ これにて今年の大尾也

昭和廿八年歳次癸巳 一九五三年

○一月一日(木)晴あたたかし 終日家居 筑摩書房より現代日本名作

選の一冊として余の作普賢白描処女懐胎を合せて刊行したるもの十部を送り来る 福永武彦にはがきを遣る、出版についての用談あればなり 夜松廬秘書^{*}四冊を通覧す また座右のフランス書二三を手あたりに読む、新旧の書一として興を発せしむるもの無し 索然として深夜ひとり起きて生ず すなはちビスキを嘗めて三ツ物をつくる

初暦柱のかげにのぞきたり

水仙挿せる百円の瓶

西洋の酒いさゝかに春めきて

後考 脇の百円の瓶は俗に過ぎたり

今焼の瓶と改むべし

^{*} 松廬秘書 野呂松廬(介石。江戸期の漢学者)の著書か。なお同名書は確認できず

○一月二日(金)晴。奥野信太郎^{*}文集柘榴の庭 宮崎嶺雄^{*}翻訳戒厳令 Camus : L'État de siège 前田純敬小説の著を贈り来る、宮崎は未見の人也 奥野は文才あれどもその見るところの高からざるを惜しむ 前田はいまだ至らず 今日もさいはひに客無し 家居して旧臘よりもちこしの小説の稟を継ぐ

^{*} 奥野信太郎 中国文学者、随筆家、歌人

^{*} 宮崎嶺雄 翻訳家、フランス文学者

○一月五日(月)晴。安部公房勅使河原宏来話 宏より蒼風著いけばな一冊、Bl. & Wh. 一本 エストミンスター二缶を贈らる。二子とともに文春クラブにて小酌 久保田万太郎に逢ふ、帰途よし田にてひとり小憩、餅一包を贈らる 今年はじめての外出にて帰来たゞちに酔臥す 山内義雄にはがきに元旦の三ツ物を書きてやる

○一月六日(火)晴。寒入なれどあたゝかし、島尾敏雄来話、臘月晦草

鹿葉子*の阪急電車に飛込自殺したるよしを聞く、二十一歳とやら未

見の女子なり、ヴァイキング社中にては才能ありし者也

*草鹿葉子 おそらく「VIRKING」同人・久坂葉子のこと

○一月七日（水）晴。夕銀座の髪床に行き帰途文春クラブに立寄る、久保田万太郎に逢ふ、帰途後夜に入つて雪となる、小説の稟を書き継ぐこと抄らず

○一月八日（木）晴。河出書房竹田博来話。余の小説及翻訳の書三冊を文庫本として出版したきよしをいふ、承諾しておく、神西清よりその訳著ワーニャ伯父さんを贈らる、一読に堪へたり

○一月九日（金）晴。山川朝子来話、終日家居

○一月十日（土）晴、夕東京温泉に浴す、吉田屋にて小酌、よし田の娘にケーキを贈る、烏森若竹にて三好達治に逢ふ、三好を草菴に招じて写本鳩舌鳥之草茎*一冊を贈る、不忍文庫*本也

松とれて十日の夜の寒からず

*鳩舌鳥之草茎 『百舌之草茎』大田南畝の随筆。駄舌（もず）、鳩は駄の異字体

*不忍文庫 江戸中期の国学者・屋代弘賢の文庫。江戸期屈指の蔵書数で知られた

○一月十二日（月）晴小雨。福永武彦に書を裁して遣る、翻訳出版について件なり、夜窪田啓作来話、猪鍋を食ひつゝ語る、窪田よりアフルパイを贈らる

○一月十四日（水）晴。旧臘より書きつぎたる小説鷹の後半五十四枚脱稟、すなはち群像の使にわたす、夜日比谷公会堂にて東京シンフォニーの演奏会を聴く、フオーレ、レキエム。シューマン、シンフォニー四番、シュトラウス、サロメのダンス。指揮齋藤秀雄。シューマンもつとも善し。徳田雅彦芝本義彦*とし田にて小酌

上段：鷹 後半五十四枚 計百四枚

○一月十六日（金）晴。午後講談社におもむく 帰途河出書房に立寄り

て銀座に出る 文春クラブ及吉田にて小酌 東京温泉にて浴す 帰来山内義雄より早稲田の大学校に出講せむことをすゝめられたれば教師商売には気乗せざれども旧友の言無にしがたくともかくにもとて履歴書といふものをしたゝむ すなはち感あり

五十年かく恥も無き寒さかな

又

かく恥のつも利てこゝに五十年あと

白雪の消なば消えなむ

○一月十七日（土）晴。山川朝子来話。荻窪の片岡氏*余のために家を借さんといふ、朝子斡旋也、朝子とともに神田におもむく。ラドリオにて小憩。それより古本屋をめぐる、帰途文春クラブに立寄る、林達夫に逢ふ、アプサントをのみ大酔す

*荻窪の片岡氏 故・片岡鉄兵（小説家）の家族

○一月十八日（日）晴。終日昏々として眠る、昨夜の酒のたゝりなり夜旧訳法王庁の抜穴を一閱す 岩波文庫より再刊のむねをいひおこせたれば也

○一月十九日（月）晴。午後日本ばし丸善におもむきつ André Gide : Les caves du Vatican, Roger Martin du Gard : Confidence africaine を購ふ Caves は文庫本増刷について参考とするため也 岩波書店および三笠書房におもむきて出版の用談をすまず、いづれも文庫本也、中央公論画廊にて古径青邨鞞彦*の素描を観る、帰途文春サロンに立寄るに山内義雄に逢ふ、また佐藤美子に逢ふ、山内とともにマンハッタン及エスポアルにてのむ、はなはだ酔ふ

*古径青邨鞞彦 小林古徑、前田青邨、安田鞞彦のこと。いずれも日本画家

○一月二十一日（水）晴。中央公論の笹原来話。山内義雄より来信。早稲田大学教授会にて余の出講を議決したるよし これも浮世の義理なるべし 山内に承諾のはがきを遣る 鳩舌をあやつる芸の日永かな

○一月二十三日（金）晴。終日家居。上方の西東三鬼*よりはじめて来信、これ未見の俳人にて窪田啓作の妻の伯父のよし 返事をかきて遣る、春近きたよりは星のまばたきか

*西東三鬼 俳人

○一月二十四日（土）晴。終日家居。窪田啓作鳥井なにがし来話

○一月二十六日（月）くもり。午後小山清来話。福永武彦来話。福永とともに新宿紀ノ国やにおもむきて書をあがなふ Angeloz* : Rilke, Hommage à Alain, NRF. 文春クラブにて福永を鷺尾洋三に紹介す 翻訳の件也 山内義雄より来信 出講（早大）の件也 返事を遣る *Angeloz ジョセフ・フランソワ・アンジェロス。フランスのドイツ文学研究者。ゲーテ、リルケの研究で知られる

○一月二十八日（水）晴。夜来夷齋清言七髪二十四枚書きつぎて今朝成る、文学界にわたす、午後山川朝子案内にて荻窪に片岡邸を訪ふ 貸間さがしなり 夜銀座よし田楼上にて川上徹太郎のそばの会あり 招かれて小酌 会するもの三好達治河盛好蔵井伏鱒二 この日銀座に火事あり

上段：髪 二十四枚 夷齋清言七

○一月二十九日（木）晴。寒し。午後東宝試写室にてフランス映画「eclair*を観る、よね及五十嵐清江同伴也 五十嵐にシゲッティ*の切符二枚依頼しおく 帰途文春クラブにて安部公房夫妻に逢ふ 安部は余の留守に訪ひ来りてその新刊の小説集を留守番に托しおけるよし也 またよし田にて群像川島勝に逢ふ 貸間さがしのはなし也

*「eclair」『快楽』マックス・オフルス監督

*シゲッティ ヨーゼフ・シゲティ。ハンガリー出身のバイオリニスト

○一月卅一日（土）晴。河出書房竹田博来話。先年春陽堂文庫より刊行せる余が翻訳人間ざらひモリエル*を市民文庫にて再刊せんことを乞ふ これを許す。午後銀座東和商事試写室にて英国映画「Outcast of the islands*を観る、コンラッド原作也 帰途文春クラブにて小酌 久保田万太郎中野好夫と語る 西東三鬼よりその句集今日を贈らる

*モリエル モリエール。17世紀のフランスの劇作家・俳優

*Outcast of the islands 『文化果つるところ』キャロル・リード監督

○二月二日（月）晴。西東三鬼より来信、すなはちその句集今日の中より 孤児孤老手を打ち遊ぶ柿の種 の一句を取つて発句となし これに脇をつけてはがきに書きて遣る、天使しぐるゝ窓の硝子絵、デュ・ガールの Confidence africaine を読む、夕文春クラブにて小酌 また久保田万太郎とともにマンハッタンにてのむ

○二月五日（木）晴。寒し。午後よねとともに荻窪片岡邸におもむく。帰途黒門町文行堂におもむきて古書を購ふ、酔竹集*二冊、あづまなまり*二冊、我おもしろ*二冊、狂歌奇人伝*六冊、袋草昏*二冊これは岡本保孝*校讐本也 文春クラブに小酌して帰る

*酔竹集 江戸後期の狂歌師・唐衣橘洲の編著書。社中を酔竹側と称した

*あづまなまり 江戸後期の狂歌師・戯作者・国学者の石川雅望（宿屋飯盛）による狂文（戯文）集

*我おもしろ 『岡持家集我おもしろ』江戸後期、手柄岡持による狂文集

*狂歌奇人伝 『狂歌奇人譚』江戸後期、狂歌師・絵師の八島定岡（岳亭春信）による狂歌師列伝。奥付表記から「狂歌現在奇人譚」とも表される。「遊民」（『江戸文学掌記』）参照

*袋草帋『袋草帋（紙）』平安後期の歌人・藤原清輔による歌論集。「袋草紙（『夷齋清言』）参照

*岡本保孝 江戸末・明治の国学者、旗本

○二月七日（土）晴。角川書店鎗田来話。「森鷗外」を角川文庫に収め
たきよしをいふ。承諾しおく、夜銀座よし田にて小酌

○二月八日（日）晴。午後よねとともに荻窪片岡邸を訪ひ移転の件を決
定す 片岡母娘と荻窪駅前助すし及コーヒー店ボンにて小憩

○二月十一日（水）晴。朝日本橋三越におもむきガス・ストーヴをあが
なひて荻窪なる片岡邸に送らしむ、帰途転居の支度にかかる、夜窪田
啓作来話、筑摩書房振出しの約束手形三枚及現金一万円を東京銀行に
預入るゝためにこれを窪田にわたす

○二月十二日（木）晴。高輪の仮寓を引払ひ杉並区清水町■■■■に移転
す これ片岡鉄兵旧宅なり

○二月十三日（金）くもり、文藝春秋岩波書店三笠書房河出書房を歴訪
す 山川朝子巖谷大四竹田博とともに神田にてうなぎを食ふ 夕文春
クラブにて安部公房夫妻と小酌 夜に入つて雨、深夜に雪、転居通知
のはかきを書く

○二月十五日（日）晴。大工来りて十五畳の書斎に戸棚をつくる工事に
着手す、夕菅原国隆来話とともに荻窪駅南口におもむきて繁すしにて小
酌また珈琲店光にてダツチコーヒーの極めて濃きものをのむ この珈
琲店には曾て余のニセモノ出沒したるよし

○二月十六日（月）晴。山川朝子竹田博来話 清酒一本河出書房より贈
らる、島尾敏雄来話、神田山本書店におもむきて疑雨集*四巻を購ふ
河出書房にて佐多稲子*に逢ふ それより文春クラブにて東郷青児濱
本浩*に逢ふ 乱酔

*疑雨集 中国明末の詩人・王次回の詩集
*佐多稲子 小説家
*濱本浩 小説家

○二月十八日（水）夜読売ホールにて俳優座正義の人々を観る 帰途中
島健蔵と新宿ととやにて小酌

○二月二十七日（金）晴。廿五日より小石川もみぢに滞在 袋草紙夷齋
清言八二十七枚かく 此夜かへる 前夜もみぢに窪田啓作を招いて
晚餐をとともにす 窪田近く東京銀行馬喰町支店に転任のよし
上段・袋草紙 廿七枚 夷齋清言八

○二月二十八日（土）晴、夕銀座陶雅堂にて花瓶一つあがなふ、またよ
し田にて小酌 河上徹太郎に逢ふ 帰途花屋にて連翹とフリーヂヤを
買ひてもどりの瓶にさす よし田よりもちかへりたるそばのみやげ
を片岡夫人に供す 三月分家賃を支払ふ

○三月二日（月）終日春雨。よし来話、荻窪駅南口いづみ*におもむき
て灰皿をあがなふ

*いづみ ほかに泉の表記あり
○三月三日（火）晴。朝巖谷大四来話。白鳥物語十二枚文藝四月号のた
めにわたす、夜銀座よし田にて小酌 雛祭なればよ志田の娘に空也の
最中を送る
上段・白鳥物語 十二枚

○三月五日（木）晴。午後田村町セントラル試写室にてフランス映画青
髯*を見る よろしからず 色を賞すべきのみ 文春クラブにて小憩
林達夫に逢ふ 夜よねを伴ひて日比谷公会堂にてシゲッティのヴィオ
ロン演奏を聴く 佳也 帰途日本ばしすし春にて少酌
*青髯 クリスチャン・ジャック監督

○三月六日（金）晴。神田村口におもむきて東坡禪岳集*五冊及画禪室
随筆*二冊をあがなふ。帰途文春クラブにて小酌、読売新聞竹田良夫
を招きてギーゼキング*初日の切符二枚を買ふ

*東坡禪岳集 『東坡禪喜集』中国明代に作られた中国北宋の文人・蘇軾（蘇東坡）
の逸話集。「東坡禪喜」（『夷齋清言』）参照

*画禪室随筆 中国明代の文人画家・董其昌の筆録
*ギーゼキング ヴァルター・ギーゼキング。ドイツのピアニスト

○三月七日（土）晴。余の誕生日也。朝いさゝか祝膳を設く 昼新宿に
おもむきて紀伊国やにフランス書を註文す 巷にて菅原国隆大田美和
に逢ひともに喫茶店にて小憩 それより髪床に行き帰途十和田にて小
酌 これははじめての店也 花を買ひて帰宅 夜東坡禪岳を読む

○三月八日（日）薄ぐもり風やや強し 午後神田一誠堂におもむきて清
輔奥儀抄八冊慶安板*をあがなひて直ちに帰宅、入浴、夜この書を一
閱す

*清輔奥儀抄八冊慶安板 藤原清輔による平安末期の歌学書の慶安年間（江戸初
期）に出された刊本。「和歌押韻」（『夷齋清言』）参照

○三月九日（月）晴。午後中央公論社画廊に広重*、銀座松坂屋に二科
会の展覧会を観る、広重よし 夕文春クラブ及よし田にて小酌、よね
に空也の最中をみやげに買ひて帰宅、この朝川端康成よりその著再婚
者を贈らる

*広重 おそらく江戸の浮世絵師・初代歌川広重のこと
○三月十一日（水）くもり夜に入つて風雨。終日家居、小山清来話、
津島未亡人よりのことづけにて故太宰治の本二冊（創芸文庫*）を贈
らる

*創芸文庫 創芸社の近代文庫版と思われる

○三月十三日（金）晴。夜窪田啓作竹田博来話、河出書房より文庫本を
出すについての用談也、窪田泊る

○三月十四日（土）晴。窪田早朝に帰る。午後新宿紀伊国やにおもむき
つフランス本をあがなふ Paul Valéry : Descartes, Jean Soulainot* : Paul
Valéry, M. Carrouges* : André Breton et les données fondamentales
du surréalisme, Rilke Gide : Correspondances, Anthologie de la Poésie
française depuis le surréalisme. 銀座よし田につ少酌

* Jean Soulainot ジャン・スレロール。フランスの詩人、評論家
* M. Carrouges ミシェル・カルージュ。本名ルイ・ジョセフ・クチュリエ。
フランスの作家、小説家

○三月十六日（月）終日雨、余寒いまだ去らず、山内義雄より来信、夜
よねとともに日比谷公会堂におもむきてギーゼキングを聴く、帰途ハ
ゲ天にて小酌

○三月十七日（火）雪。午後晴。田村町兼坂ビルにてフランス天然色写
真 Montmartre nocturne*を観る。おもしろし。帰途鷺尾洋三に逢ひ
はせ川及文春クラブにて小酌。ケテルにてチーズをあがなひて帰る
この朝菅原国隆来話

* Montmartre nocturne 『モンマルトル夜想曲』ジャン・クロード・ベルナ
ー 監督

○三月十八日（水）晴。中野重治より来信。午後日比谷第一生命ホー
ルにてフランス映画 Les sept péchés capitaux*を観る 佐藤美子川島
勝に逢ひともによし田にて小酌、それよりスバル座にてチャプリ
ン Limelight*を観る。有楽町喫茶店にて小憩して帰る

* Les sept péchés capitaux 『七つの大罪』ジョルジュ・ラコンブ監督他、フ
作のオムニバス

* Linelight 『ライムライト』チャールズ・チャップリン監督のアメリカ映画
○三月十九日（木）晴。島尾敏雄来話。新日本文学会への寄付若干を島尾にわたす

○三月二十四日（火）晴。夜新橋演舞場にて藤原歌劇団のラ・ボエームを観る、藤原義江*衰へたるかな 帰途銀座よし田にて小酌

* 藤原義江 オペラ・歌曲歌手、藤原歌劇団創設者

○三月二十六日（木）晴。夕文藝春秋クラブにて窪田啓作に逢ひ筑摩書房の手形の金を受取る。それより山内義雄桶谷繁雄*窪田とともに麴町丹波やにおもむきてうなぎを食ふ 窪田来泊

* 桶谷繁雄 冶金学者・著述家

○三月二十九日（日）雨、終日家居、和歌押韻（夷齋清言九）二十七枚脱稟

上段…和歌押韻 夷齋清言九 二十七枚

○三月卅一日（火）晴。朝芸術新潮向坂来話。午後神田山本におもむきて東坡先生書伝*四冊玉台新詠集*三冊を購ふ 銀座文春クラブにて小酌

* 東坡先生書伝 「東坡書伝」とも記される。中国・北宋の蘇東坡（蘇軾）による

尚書（書経）注釈書

* 玉台新詠集 中国南北朝時代に編纂された詩集。南朝陳の徐陵の撰

○四月一日（水）晴。終日家居、岩波書店より文庫本法王庁の抜穴十部送り来る、十余年ぶりにての増刷也 雨月物語を読む これが新釈を出せよと別冊文藝春秋の請あれば也

○四月二日（木）晴。パリなる加藤周一より来信 午後東亜商事試写室にて英国映画リディア*を観る 帰途文春クラブ及すし春にて小酌 なほ文藝春秋社にて洋服を注文す

* リディア 『リディアと四人の恋人』ジュリアン・デュヴィヴィエ監督

○四月四日（土）晴。ときに小雨。井澤義雄昨夜来泊、今日帰る、紀ノ国屋におもむきつ Maurice Bémol* : Paul Valéry を注文す

* Maurice Bémol モーリス・ベメル。フランスの文芸評論家

○四月六日（月）くもり、山内義雄より来信、早稲田学校の出講表を送り来る、はがきに歌をかきて遣る 庭上即景 わが庭に桃の花咲く朝ごとに雀とまりて蕾ついでばむ 夕呉服橋相互ビルにて縮図*の試写を見る、つまらなし、丸善につ Le rouge et le noir*を購ふ、文春クラブにて小酌

* 縮図 新藤兼人監督の映画

* Le rouge et le noir おそろくスタンダール『赤と黒』

○四月七日（火）晴。山川朝子来話。三時よりアメリカンクラブにて福田恆存訳老人と海（ヘミングウェイ）のためのカクテルパーティーにおもむく、夕田村町旧セントラル試写室にてアメリカ映画 The big sky*を見る、つまらなし 田川博一らとともに新ばし及新宿にて少酌

* The big sky 『果てしなき蒼空』ハワード・ホークス監督

○四月十一日（土）雨、新宿紀の国やにおもむきて仏書を購ふ クローデルジャム書簡集 リルケ Lettres à une musicienne 山内義雄より来信 病臥のよしをつたふ

○四月十二日（日）くもり小雨、終日家居、新釈雨月物語その一吉備津の釜二十一枚書く

上段…吉備津の釜 廿一枚

○四月十四日（火）晴。終日家居、安部公房来話

○四月廿二日（水）晴。はじめて早稲田学校に出講す 帰途文春クラブにて久保田万太郎に逢ひそれより同行数輩池ノ端鳥栄にて小酌さらに

仲の町松葉やにおもむきて盛宴、巻せんべいをみやげにもらふ

○四月二十八日（火）晴 夜来東坡禅喜の稟を草す二十四枚これ夷齋清言十也 文学界にわたす 文春クラブにて永井龍男と将棋をさす 一勝一敗也 窪田啓作に逢ひすし春にて小酌 昨日講談社松井勲来話、短篇集鷹刊行の申入也

上段…東坡禅喜 二十四枚 夷齋清言十

○四月三十日（木）風雨夜に入つてしづまる、講談社松井勲来話、短篇集鷹の原稟をわたす

内容 善財 片しぐれ 野守鏡 影ふたつ
夜は夜もすがら 妖女 梟 鷹

松井及同伴の川島勝をつれて新宿十和田に小酌またととやに転ずとゝやにて亀井勝一郎*有木勉*印南寛*に逢ふ 印南わが家まで送り来る

* 亀井勝一郎 文芸評論家

* 有木勉 講談社「群像」の編集者

* 印南寛 編集者

○五月一日（金）くもり、夜日比谷公会堂につ Marian Anderson*の独唱を聴く、帰途すし春にて小憩

* Marian Anderson マリアン・アンダーソン。オペラからアメリカ民謡、靈歌まで歌いこなした名歌手

○五月二日（土）晴。夜文春クラブにつ Damia*の独唱を聴く、さしたることなし この日村口書房にて岡島援之の唐話纂要*をあがなふ

* Damia ダミア。フランスのシャンソン歌手。ダミヤの表記もあり

* 唐話纂要 岡島援之（冠山）が著した江戸中期の語学書。唐話（中国語）の語句、格言、会話文に和訳を記す。「和訓」（『夷齋清言』）参照

○五月五日（火）晴。三日より信州上山田におもきて今日かへる。一行佐藤美子高木東六*近藤日出造那須良輔*徳田雅彦也 瀧の湯に泊る

四日屋代学校にて講演す はじめての講演也 そのうち筑摩川のツケ場にてハヤを投網にて捕りたぐちにこれを食す たぐその味美とはいひがたし この夜福龍が家の小福といふ芸者わが枕席を襲ふ これを拒まず ハチノコのカンヅメ及信州みそをみやげにもらふ

* 高木東六 作曲家・ピアニスト

* 那須良輔 漫画家

○五月六日（水）小雨。ワセダに出講す、山内義雄と閑談 はじめてワセダより月給袋といふものをもらふ その軽きこと笑ふに堪へたり 帰途文春クラブにて小酌

○五月七日（木）雨。午後日比谷第一生命ホールにて英国写真ムーランルージュ*を観る、ロートレックの生活を絵様に仕組みたるものも也 テクニカラーの色を見るべきのみ 帰途河盛好蔵中野好夫と文春クラブ及新宿みちくさにて小酌

* ムーランルージュ 『赤い風車』ジョン・ヒューストン監督のイギリス・アメリカ合作映画

○五月八日（金）くもり後雨 午刻山川朝子来話 未刻日本橋相互ビルにて朝子とともにジョンクロホードの写真 Sudden Fear*を見る、日本橋泰明軒にて小酌 さら文春クラブにて吉田健一に逢ひすし春にて転じてのむ よねにすしのみやげもちて帰る

* Sudden Fear 『突然の恐怖』デヴィッド・ミラー監督、ジョーン・クロフォード主演・製作のアメリカ映画

○五月九日（土）晴。講談社原田裕松井勲来話 短編集鷹を出版するにつき契約書を取交す 新宿とゝやにて小酌 短夜の口紅しろき別れか

な

○五月十二日（火）くもり小雨。午後田村町兼坂ビルにてコクトオの写真 *L'Aigle à deux têtes** を観る 井伏鱒二に逢ふ 夜赤坂山ノ茶屋にて文藝春秋の句会に列す 三好達治に逢ふ 帰途三好とゝもに鳥森若竹にて小酌 堀口大学に逢ふ

* *L'Aigle à deux têtes* 〔双頭の鷲〕ジャン・コクトー監督のフランス映画

○五月二十日（水）晴。朝新宿紀伊国やにてフランス書をあがなふ Henry Miller : *Souvenir souvenirs* , Lou Albert-Lasard* : *Une image de Rilke, Maurice Bémol : Variations sur Valéry ; La méthode critique de Paul Valéry* 早稲田に出講 研究室にて新庄嘉章に逢ひ日本フランス文学会総会における講演を依頼さる、山内義雄盲腸炎にて休講中也 学校よりの帰途安藤更生に逢ひ高田牧舎にてビールをのむ 夜文春クラブにてアメリカ記者 Stuart Griffin* と語る Interview 也 それより高見順*と有楽町あきよにおもむく またエスポアに転ず 東郷青児余の似顔をかく

* Lou Albert-Lasard ルー・アルベール・ラザール。フランスの画家、リルケの恋人

* 新庄嘉章 フランス文学者

* Stuart Griffin スチュワート・グリフィン。"Japanese Food and Cooking" (一九五五年) という著作もある

* 高見順 小説家

○五月二十二日（金）晴。午後日比谷公会堂にてダミヤを聴く。帰途文春クラブにて海老名雄二に逢ひニュートーキョー及すし春にて少酌

○五月二十五日（月）晴。昼安藤更生来話、秋永一枝*を伴ひ来りて余が門に賛をとらしむ 安藤及秋永と牛込飯塚におもむきて小酌 それ

より上野本牧亭にて講釈を聴く また向島に車を走らせて三囲社境内をあるき長命寺さくら餅やにて小憩 枕ばしよりポンポン蒸汽にて横網にあらがり新宿をへて帰宅 やや疲れたり

* 秋永一枝 日本語学者

○五月廿八日（木）晴。加藤周一福永武彦より来信、加藤は南仏カテドラルの美を論じ福永はローヂエマルタンデュガールの小著の翻訳成れるを告ぐ、夜日本ばしすし春にて窪田啓作に逢ふ この日追分なる堀辰雄の死を聞く

○五月廿九日（金）雨のちくもり。和訓廿四枚（夷齋清言十一）を文学界にわたす 文春クラブにて三好達治永井龍男に逢ひ将棋をさす 三好とすし春にて少酌

上段・和訓廿四枚 夷齋清言十一

○六月二日（火）雨のちくもり、夜東京会館にて堀口大学のためのカクテル・パーティあり出席す 会は新潮社主催也 前夜暴飲のため胃痛はげしく二杯のカクテルをもてあます たゞちに帰宅

○六月三日（水）くもり、夕芝増上寺にして堀辰雄の告別式に列す 帰途巖谷大四と銀座よし田にて小酌

○六月五日（金）曇のち雨。午後本郷通におもむきて古本屋にて西陽雜俎*及木内石亭雲根志*をあがなふ 帰途上野山下に出でたるに雨に逢ひ蓮玉庵に雨のやむを待つてそばを食ふ

* 西陽雜俎 中国唐代の段成式による随筆、内容は博物学から奇事異談にまで亘る

* 雲根志 江戸中期、木内石亭の著した石に関する博物誌。「譜」（『夷齋清言』）参照

○六月六日（土）くもり。夜六時より帝国ホテルのホールにてダミア送

別会におもむく。三日前より腹痛はなだし胃潰瘍なるがごとし

○六月七日（日）雨、終日家居、新釈雨月物語その二 仏法僧二十枚かく上段・仏法僧 二十枚 新釈雨月物語その二

○六月十三日（土）晴。午後一時より読売ホールに於ける日本フランス文学会講演会におもむきリルケについて講演す 二十五分 夜茅場町其角における小宴に招かる 帰途新ばし若竹にて三好達治桑原武夫生島遼一*と少酌

* 生島遼一 フランス文学者・文芸評論家

○六月十七日（水）晴。早稲田に出講、山内義雄病すこしく怠りて登校するに逢ふ 帰途神田山本書店にて石譜*一冊藝苑厄言*八冊洪容齋筆記*十冊をあがなふ 銀座よし田にて小酌ブーチャンとともに岡田*にてのむ

* 石譜 奇石、奇岩を記録したもの、ここでは中国の石譜。「譜」（『夷齋清言』）参照

* 藝苑厄言 中国明代に書法・書論をよくした評論家・王世貞による古今の書についての見解を述べた著作

* 洪容齋筆記 中国宋代の洪邁（容斎）の随筆集。歴史、文学、哲学、芸術、中でも前代および宋代の歴史事実や政治・社会経済制度に関する考証、歴史人物に対する評論などに詳しい

* 岡田 銀座の小料理屋「はち巻岡田」のことか

○六月十八日（木）雨。夕安部公房夫妻及講談社松井勲来話。安部北海道に講演旅行におもむきたるよし 燠製ニシン二尾を贈らる

○六月二十九日（月）くもり、夜来譜二十四枚を書く 夷齋清言はこれへ一まづ終とす ロンドンフィルムのなんとかの試写を見る 京ばし小ま津*にて小酌 このうなぎよろし

上段・譜 夷齋清言十二 二十四枚

* 小ま津 小松との表記もあり

○七月一日（水）晴。よねと銀座におもむき松屋にてシャツを買ふ。帰途文春サロンに寄る、佐藤美子東郷青児と逢ふ 新潮社新田敞を招き岡田にてのむ、すし春若竹をめぐりて帰宅、京都なる桑原武夫より来信 かの学派ちかく上京のよしを知らせ来る

○七月二日（木）晴。夕新宿紀ノ国屋にて Maurice Bémol : Paul Valéry 及 Petit Larousse を購ふ よねとゝもに日本ばしすし春及銀座岡田にて小酌

○七月四日（土）くもり、吉川幸次郎より来信 七月七日上京 文春クラブにて会見のむねを告げ来る、夜日比谷第一生命ホールにて文学座公演三島由紀夫の夜の向日葵を観る 帰途すし春にて少酌

○七月五日（日）くもり、終日家居、鈴木信太郎*翻訳集（白水社）朝吹三吉訳泥棒日記をそれぞれの訳者より贈らる

* 鈴木信太郎 フランス文学者

○七月七日（火）くもり小雨、夕文春クラブにて洛の貝塚茂樹吉川幸次郎桑原武夫と会す、池島信平これに加はりて松山及エスポアルにてのむ、さらに駿台荘におもむきて三好達治に逢ふ 大酔

○七月九日（木）くもり、晴間もあり雨もあり、昼講談社松井勲来話 短篇集鷹まさに成らんとすといふ 角川書店より来信これまた文庫本の「森鷗外」の近く上梓されるべきよしを報ず 夕山王の山の茶屋にて句会あり 盗人のおこなひすまし夏のれん 帰途三好達治と銀座岡田及新宿ととやにて少酌

○七月十日（金）くもり小雨、終日家居、新潮社新田敞より電話にて夷齋清言を限定板にて上梓すべきよしを告げ来る、窪田啓作よりバ

ンジャマン・コンスタン*のセシルの訳著を贈らる たゞちに読了す、山本書店より先日あがなひたる本の包二つ届く、いまだこれを開かず二如亭群芳譜*及珊瑚網*なり

*バンジャマン・コンスタン フランスの作家、政治家、思想家

*二如亭群芳譜 中国明代の王象晋による植物の特徴と品種、園芸技術、関連植物、典故、詩歌を載せ論述したもの、四庫全書に収録

*珊瑚網 中国明代の汪珂玉による書画録、四庫全書に収録

○七月十二日(日)晴。終日家居、朝吹三吉より贈られたる泥棒日記の翻訳を読了す、三笠書房竹内道之助負債のために家出したるよし新聞にて知る

○七月十三日(月)晴。三笠書房におもむきて文庫本赤い百合十冊をもちかへる、三笠ごたごたにてこの印税はとれる見込なし

○七月十四日(火)晴。新潮社新田敵来、夷齋清言の原稟をわたす、角川源義来、全集本に入ることを乞ふ、拒絶す、夜文春クラブにて永井龍男と将棋をさす、帰途新宿とゝやにて少酌

○七月十七日(金)晴。夕よねとともに麹町丹波屋にて少酌

○七月十九日(日)雨。昨日よりの豪雨にて紀州水害のよし、竹田博来話、荻窪のうなぎ屋にて小酌 夢応の鯉魚十五枚かく

上段…夢応の鯉魚 十五枚 雨月物語三

○七月二十日(月)雨のち曇、夕文春クラブにて坂口安吾東郷青児福永武彦に逢ふ、岡田にて少酌

○七月二十二日(水)晴。鷹上木成る。講談社松井勲本を届け来る。夜銀座にてのむ

○七月二十九日(水)晴、酷暑也、夕銀座にて小酌、天賞堂にてよねのために「Traveler-montre*」を購ふ

*Traveler-montre 旅行用懐中時計

○七月三十一日(金)晴。角川文庫本森鷗外成る。鎗田清次郎十部届け来る。夜大田美和松井勲と文春クラブ及岡田にて小酌、岡田にて久保田万太郎三好達治河上徹太郎吉田健一に逢ひよし原松葉やに転じて盛宴

○八月一日(土)晴。十時二十分上野発。志賀高原ホテルに泊る、当分滞在のつもり

上段…志賀高原日記

○八月三日(月)晴。上林温泉塵表閣にて昼食

○八月四日(火)晴。渋の町をあるく、愚劣也 ふたゝび山上にのぼればただ涼し

○八月五日(水)晴。発哺におもむきて天狗湯にて生島遼一に逢ふ 宿屋満員にてビールものまずに帰る

○八月七日(金)曇ときどき雨、峡中霧多くして陰晴定まらず、生島遼一及その女弟子来話 ホテル食堂にて昼餐をとともにす

○八月十日(月)晴。峡中また暑きほどなり、昼熊の湯におもむきて小酌 イワナの塩焼うまし 廉価也 質朴愛すべし

○八月十一日(火)晴。朝よね来。夕大岡昇平むつ子を携へて来る、大岡とはじめて将棋をさし二勝一敗勝越也 夜鷲尾洋三あやしき女を伴ひて来れるに逢ふ

○八月十二日(水)晴曇定まらず 昼よねとともに発哺薬師湯におもむきて午餐、この店よろしからず、帰途発哺より谷を下りて山間の径約一里をあゆみて丸池のホテルにかへる いさゝか疲れたり、夜大岡昇平と将棋をさす一勝一敗

○八月十三日(木)朝霧谷より湧いて清涼晩秋のごとし よね午後一時

の汽車にて帰京するにつき車を命じてこれを長野駅まで送る ホテル支配人渡辺同道す 長野の町をあるきそばを食ふ うまくなし 夜ホテルロビーにて生島遼一大岡昇平とビールをのんで歓談す

○八月十四日(金)くもり。大岡昇平生島遼一鷲尾洋三みなホテルを退去す、新潮社より電話にて短篇集上梓の件をいひ来る、昨夜ロビーにて大岡と将棋をさし二敗すなはち一つ負越になりたるところ今日大岡出発前に挑戦し来りて一番さして一勝す、これにて対局数八番勝負なし

○八月十六日(日)晴 上林塵表閣におもむきて昼餐鯉よろし、大岡昇平と将棋をさす、二敗一勝、これにて十一番のうち一局負越なり、大岡及むつ子と地獄谷を見に行く 茶屋にてちまきを食ふ、それより溪流に沿つて渋に至り町中のそばやにて小憩 また塵表閣にもどり夜に入つて湯田中の芸者二名をよぶ いづれも醜女にて芸の無きこと呆れるばかり也 深夜車にてホテルに帰る

○八月十七日(月)晴。けふは高原なほ暑きほどなり、湯田中におもむきて徒歩渋に至る、昨日のそばや長野やにて小憩、夕ホテルに帰る、ロビーにて県観光課長下平^{シモヘラ}ながしに逢ふ

○八月十八日(火)くもり、毎日新聞記者桑原隆次郎面会を求む 将棋をさす

○八月十九日(水)雨、朝三好達治大岡昇平上林より来泊、三好は前夜着のよし すなはち相会して酒のみ将棋をさす

○八月二十日(木)晴。高原にしてなほ暑し 朝三好達治大岡昇平とアサヒ山にのぼる、午後将棋をさして夜に至る

○八月二十一日(金)晴。朝ホテルを車にて出発 三好達治大岡昇平とジンフィーズの別杯をくむ 車の小布施村を通るついでに小布施堂に

て名物の栗かのこ及栗羊羹をみやげに購ふ このあたり栗よし また

ここより志賀高原にかけてホップの栽培しきり也 今年よりたばこを作るといふ農民 米作のみにては食へぬといふ事情もあるが如し 長野駅にて列車に乗る 午後一時発はなはだ混雑す 夕上野に着くに炎暑蒸すがごとし 日本ばしすし春にて小酌して帰宅

○八月二十三日(日)昨夜雷雨けふくもりにて涼し 新宿紀国やにてJ-P.Sartre : Saint Genet をあがなふ

○八月二十四日(月)晴。朝大田美和来、余の作品を掲載せる雑誌二十数冊を貸与す、新潮社より短篇集を出版せんがため也 夕よね及池田活子と日本ばしすし春におもむきて少酌、よねの時計を天賞堂に托して修繕せしむ

○八月廿五日(火)雨。はなはだ涼し、講談社松井勲来話、検印をわたす、鷹千五百部増刷すべしといふ、松井妻死児を生めるよし

○八月二十六日(水)晴。早稲田大学秋山澄夫*来話 その訳著マラルメ詩集並に岡山産白桃五箇贈らる 岩波書店塙作楽*来話 原稟依頼也 ことわる 新潮社におもむき文庫本の印税を受取る 村口四郎*をさそひ銀座岡田にて少酌

*秋山澄夫 フランス文学者

*塙作楽 小説家、郷土史家

*村口四郎 村口書房店主

○八月廿七日(木)雨。夕文春クラブにおもむく、巷にて岡本太郎に逢ふ、ともに岡田にて少酌、久保田万太郎伊藤喜朔藤間政弥*に逢ふ

*藤間政弥 日本舞踊家。東をどりの礎を作った

○八月卅日(日)雨。安部公房来話。ビールをのんで閑談 小布施のキントンをみやげに贈る

○八月卅一日（月）晴。よねとゝもに銀座に行き天賞堂にてよねの時計

修繕したるを受取る、帰途文春クラブ及小松にて小酌

○九月一日（火）雨、終日家居、河出書房竹田博来話 講談社原田某檜橋某来話

○九月二日（水）晴。上野に二科展を観る、つまらなし 夜徳田雅彦鷲尾洋三とともに岡田ノアルエスボアル小笹すし等にて小酌 外電にジャックティボー*飛行機事故にてアルプスにて遭難死亡せりと伝ふ*ジャックティボー ジャック・ティボー。フランス出身のヴァイオリニスト。3度目の来日の道中、飛行機事故に遭つた

○九月三日（木）晴、信州追分堀多恵より故堀辰雄の稿本かげろふの日記残闕を復刻せるもの一部を贈らる けだし香典がへしなるべし 夕刊に折口信夫の訃をつたふ

○九月八日（火）晴。秋山澄夫来話、画家上林大詔*を伴ひ来りてその画会のちらしに署名を求む 山川朝子来話、閑談夕刻に及ぶ、こども六人生みたき念願のよし也 夜群像川島勝来、俳優座長森なにがしを同伴す

*上林大詔 日本画家

○九月九日（水）晴。朝大田美和来話、夷齋清言の叙及黄金伝説の抜刷をわたす。

○九月十三日（日）雨。夜神田共立講堂にて森鷗外雁の映画公開試写会あり 文藝春秋の依頼にて講演 ばかばかしきことなり

○九月十四日（月）くもり、奥湯河原加満田旅館に泊

上段…湯河原日記

○九月廿日（日）晴。窪田啓作当宿に來りて泊る。ジョニオカ*を贈らる。大岡昇平新潮の菅原国隆を介して志賀高原にてうつせる写真四葉送り

来る

*ジョニオカ ウィスキーのジョニーウォーカーのことか

○九月廿一日（月）*。よね加満田に來泊

*この日と翌日は天氣の記載無し

○九月廿二日（火）よね帰京、この日仲秋名月也 夜窪田啓作と語る、よねにカマボコをみやげにもたせて遣る

○九月廿三日（水）くもりのち雨、川島勝来、原稟催促也 夜窪田を招き川島と三人にて牛鍋を食ふ、窪田川島ともに帰る

○九月廿五日（金）風雨、奥湯河原より帰京 文春クラブにて美国*より帰れる河上徹太郎に逢ふ 群像大久保に珊瑚九十七枚をわたす、夜帰宅せるに京都の紙屋（岡忠）来る 夷齋清言の用紙の件也 この日台風近畿を襲ふと聞く

上段…珊瑚九十七枚

*美国 アメリカのこと

○九月廿六日（土）晴 夜日比谷公会堂にてソロモン*のピアノレサイタルを聴く 帰途日本ばしすし春にて少酌 河盛好蔵に逢ふ、ともに車にて帰宅

*ソロモン イギリスのピアニスト

○九月二十七日（日）晴、夕毎日新聞桑原記者来話 将棋をさす

○九月廿八日（月）晴 新宿紀ノ国屋にてClaude Mauriac* : Hommes et idées d'aujourd'hui を購ふ 夜文春クラブにて佐藤美子および徳田雅彦に逢ひ岡田にて小宴 また池島信平の欧州より帰れるに逢ふ

* Claude Mauriac クロード・モーリアック。フランスの作家。フランソワ・モーリャックの子

○九月廿九日（火）くもり、芝本善雄*来話、夜日比谷公会堂にアイザツ

クスターン*のヴィオロンを聴く よね同伴し帰途平安餐室にて晚餐 アムールのさち子に逢ひその店にて小酌

*アイザツクスターン アイザック・スターン。アメリカのヴァイオリニスト

○九月卅日（水）くもり、群像川島勝来話、毎日新聞木村正来写真師を伴ひ来りて書斎の写真といふものをうつさる 終日家居

○十月一日（木）雨、午後東京銀行馬喰町支店におもむきて窪田啓作に逢ふ、東和商事にて三文オペラ*（オリヴィエ）の試写をみる 文春クラブにて安部公房に逢ふ、田屋にてネクタイを買ふ 京ばし小松にて小酌

*三文オペラ ピーター・ブルック監督のイギリス映画。ローレンス・オリヴィエ主演

○十月八日（木）晴、菊花の約二十二枚文藝春秋別冊にわたす 夜田川博一鈴木貢と岡田、エスボアル、アカンサスにて小酌

上段…菊花の約 廿二枚 新釈雨月物語その四

○十月十二日（月）雨、夜講談社川島勝松井勲をしたがへて銀座はせ川にて小酌

かきつばたむかしはむかし 今は今 傘雨 七夕近き橋の夕ぐれ 夷齋

○十月十三日（火）*京都若清水山莊泊 夜木屋町三条河しげにて乱酔あかつきを覚えす

*この日は天氣の記載無し

上段…京都日記

○十月十四日（水）晴、車にて大徳寺弧蓬庵龍安寺西芳寺（コケ寺）を一巡し竹苞楼*にて写本二都聞書花月の日記*及鼈頭癩癥談*二部の書を購入 帰途フヤ町河道屋にてそばを食ふ 龍安寺の石庭はその根柢

に於て水の思想あるに似たるをおぼゆ

*竹苞楼 京都の古書店・竹苞書樓のこと

*二都聞書花月の日記 『二都聞書』花月の日記』江戸後期、流水亭主人の著

*鼈頭癩癥談 『癩癥談（くせものがたり）』江戸後期の読本作者・国学者の上田秋成（『雨月物語』の著者）による伊勢物語を模した滑稽本。鼈頭（頭注）付。後日石川淳が現代語訳を出す

○十月十五日（木）晴。吉川桑原生島三氏招待にて西陣大市にて宴のち祇園木村咲にて清遊 妓に句を書きてやる 井上流富子来 次郎冠者翁格子のしぐれかな（登代香に）

益千代の市松冴ゆるわかれかな

○十月十六日（金）晴。吉川桑原生島三家に女中を遣はしていづうの鯖ずしを贈る 夜女中を携へて河しげにて小酌 また祇園つぼさかのビフテキを食ふ

○十月十七日（土）晴 斎藤菊太郎*来話 貝塚茂樹所贈殷代青銅文化の研究一冊を将来す 斎藤案内にて嵯峨落柿舎天龍寺を見て嵐山に至る 落柿舎いふに足らざれど竹藪のほとりより嵐山を望みたるけしきよし（ここ至る途中広沢の池またよし）天龍寺の方丈の庭その半よく半は後世の手人と見えて石組おぼつかなし 嵐山北松にて小酌 この家さきごろの被害にて壁ぎはまで水につかりたりといふ 女主人すえ大坂新町の出のよしにてうれしき氣質のやつ也（斎藤より林巳奈夫*のスキヤンダルをきく）

*斎藤菊太郎 陶磁史研究者

*林巳奈夫 中国古代の考古学者

○十月十八日（日）晴。富岡益太郎*邸に斎藤菊太郎を訪ふ 鉄斎遺墨十数幅、屏風一曲八双*、仇英*一卷白描人物、刊本肅尺木*図離騷*（明

板^{イタ}）おなじく明板^{メイバン}八種画譜^{ハシュウガフ}*その他を示さる 斎藤をさそひて寺町三条三島亭^{ミヤジマテ}にてオイル焼を食ふ この牛肉よし 斎藤の咄に京都名物かねよの茶づけ鰻松前やの塩こぶ道昆のちまきいづうの鯖ずし最もみやげに適す也

*富岡益太郎 鉄斎の孫。のちに鉄斎美術館初代館長を務める

*一曲八双 八曲一雙の誤記か

*仇英 中国明代の画家、院派三大家の一人

*蕭尺木 蕭雲從（字…尺木）。中国明代の南画家。池大雅、祇園南海ら江戸期の初期の文人画家に影響を与えた

*離騷 中国戦国時代の楚の屈原作と伝えられる詩

*八種画譜 中国の画譜、明版ほか和刻本も作られるなど、『芥子園画伝』同様近世美術に大きな影響を与えた

○十月十九日（月）晴。朝桑原武夫より電話にて放送局の紹介にて桂離宮見物の書類手に入るべしとあればすなはちその書類を局より届けさせて午後桂の地におもむく 宮のうち一めぐりするにあたかも旧知のひとに遭ふがごとし 知るところをたしかむまた一見の益ありしといふべし

探幽^{*}に秋日さしたり桂棚

夜河しげにて乱酔すなはち酔覚錯落たり

*探幽 狩野探幽。江戸初期の絵師。桂離宮新御殿の桂棚の小襖絵などを担った

○十月廿日（火）晴、東帰いづうの鯖ずしをみやげとす

○十月二十一日（水）晴。松井勲来話、小説集珊瑚を講談社より刊行することゝしてその原藁を松井にわたす 夜銀座にて池島信平と少酌

珊瑚内容 鳳凰 南枝向日 篠船 梟 合縁奇縁

夢の殺人 他人の自由 珊瑚

*松丸東魚 篆刻家

○十月廿九日（木）くもり小雨、夕文春クラブにて薄井恭一に印の代金を支払ふ 鷺尾洋三徳田雅彦芝本善彦と逢ひ鷺尾案内にて築地ふく源におもむきてふぐ料理を食ふ それよりノアル及びエスポアルにて小酌 クラブよりサンドマンのシェリイ一本みやげにもちて帰る

○十一月三日（火）晴、夜後樂園につ American Holiday on Ice^{*}を観る 綺麗なれどもあと引かざるが如きもの也

* American Holiday on Ice American Holiday on Ice アイススケートショー
○十一月九日（日）晴 朝講談社松井勲来 鷹三板^{トウサン}のために検印をあづく（二千部）夕銀座東京画廊にて小泉清の個展を見る 小泉とよし田にて小酌

○十一月十日（火）くもり、山川朝子来話、夕神田村口におもむく 京伝^{*}画銅脈^{*}賛の一軸を購入ふ これ洛の竹苞楼より将来したるもの也 なほ村口より朱肉を贈らる また今半にて牛鍋を饗せらる^{*}

*京伝 山東京伝。江戸後期の浮世絵師、戯作者

*銅脈 江戸中・後期の戯作者、狂詩作者

*この一連の顚末は「山東京傳の畫幅」〔一虚一盈〕所収、初出「東京新聞」昭和30年10月3日夕刊）に詳しい

○十一月十二日―廿四日* 湯河原加満田滞在 鳴神前半四十六枚書く、この間講談社より刊行予定の珊瑚の校正を見る、十四日晚熱海ホテルに一泊す、窪田啓作を大磯のその家に訪ひて坂田山をあらく また国よしのうなぎを饗せらる、このうなぎや古びたる家にて欄間に慶^{ウキ}筆横書に表功報徳の扁額を掲げたり 但うなぎはうまくなし

*この間は曜日・天気の記事なし

*慶^{ウキ} 徳川慶喜か

○十月廿二日（木）晴、銀座よし田におもむくに忠さんの計をきく脳溢血のよし也 岡田にて小酌、帰途村口に寄りて掛物二幅をもちかへる 蜀山真顔飯盛三陀羅市人長根俊満^{*}寄書の六歌仙一幅 栄之^{*}画蜀山贊一幅

鏡山いざ立ちよりて見て行かん年へぬる身は老やしぬると 黒主^{*}

あさみどり糸よりかけん白露を玉にもぬける春の柳か 僧正遍照^{*}

*蜀山真顔飯盛三陀羅市人長根俊満 いずれも江戸後期狂歌師の大田南畝（蜀山人）・鹿都部真顔・宿屋飯盛・三陀羅法師・浅草庵市人・芍薬亭長根と、浮世絵師で戯作者の窪俊満による寄書と推定

*栄之 鳥文齋栄之。江戸後期の浮世絵師

*黒主 大伴黒主。平安時代の歌人

*僧正遍照 平安時代前期の僧・歌人

○十月廿六日（月）晴 正午山川朝子来話原藁依頼也 午後上野美術館におもむくに入口にて山内義雄夫妻に逢ひ食堂にてビールをのむ 自由美術展にて安部真知子^{*}のエツチングをみる 藤川栄子に逢ふ 安部夫妻真鍋呉夫とゝもに博物館にてルオー^{*}をみる 帰途精養軒にて小憩 それよりひとり銀座に出て文春クラブ及京ばし小松にて少酌

*安部真知子 安部公房の妻で画家・舞台美術家の安部真知のこと

*ルオー ジョルジュ・ルオー。フランスの画家

○十月廿八日（水）小雨、早稲田におもむく 大隈会館にて山内義雄と昼めしをくふ 帰途文春クラブにて薄井恭一^{*}より松丸東魚^{*}刻の印二種を受取る 夷齋（白文）昨日花舎（朱文） 永井龍男より先日酔態を悔いたるはがきを寄こしたればこちらもはがき書きて遣る 句を添ふ 秋菊の袖にのこれる酒のしみ 仙ずしにて小酌

*薄井恭一 文藝春秋社の編集者、料理評論家

○十二月三日（木）雨。吉川幸次郎よりその著中国の知^チ恵を贈らる はがきに句を書きて遣る 夜帝劇に文藝春秋祭におもむく 帰途新マルビル・ポールスターにて小酌 よねにみやげをもちて帰る

○十二月七日（月）晴 さる四日より呉服ばし千代田荘に泊りて浅茅ヶ宿（雨月五）二十一枚書く

上段…浅茅ヶ宿 二十一枚 新釈雨月物語

○十二月十四日（月）晴あたゝか也 講談社松井勲珊瑚の成れるを持参す 朝尾関栄^{*}来話 原藁依頼也

*尾関栄 文藝春秋社の編集者

○十二月廿一日（月）晴。だからいはいことぢやない（十六枚）書く 文藝春秋二月号のエセエ也

上段…だからいはいことぢやない 十六枚

○十二月卅一日（木）晴。日記を記すに懶くはなはだ怠る 今夜福永武彦とゝもに日本ばしすし春にて小酌 よし田のそばをみやげにもちて帰る 一年夢うつゝに過ぎたり

昭和廿九年歳次甲午 一九五四

○一月一日（金）晴、風なくして気やはらぐ、終日家居、蜀山人判取帳^{*}若樹^{*}子纂本竹清^{*}子箱也を閲し René Lang^{*}: Rilke, Gide, et Valéryを読み、Jean Genet: Notre-Dame des Fleurs と訳本とを併せ見る 訳本は訳者堀口大学により大年の夜に贈られたるもの也 夜マテルのコルドンブルウをのみつゝ吉例に依つて三ツ物をつくる

机辺なほととのけしきや去年今年

炭つぎたして酒をあたいむ

かたよれば礼者の足も遠のきて

*判取帳 大田南畝の著作、書画帖に筆者について短註も付されてゐる

*若樹 明治ゝ昭和の蒐集家・林若樹

*竹清 明治ゝ昭和の書誌学者・三村竹清

*René Lang ルネ・ラング。フランスの20世紀フランス・ドイツ文学研究者

○一月二日(土) 晴。菅原国隆年賀に来る

○一月五日(火) 晴。夜安部公房来話、置酒閑談

○一月六日(水) 晴、小寒なれど気温にして春暖に似たり 夷齋清言の再校を閲す 夜北川松子マリ子来、晚餐とともにす

○一月七日(木) 晴、山川朝子来話、朝子とともに河出書房へおもむき 巖谷大四を伴つて日本ばしすし春にて小酌 新宿に転じて玉突きをす 朝子それより帰る 巖谷ととゝやにてまた酒を酌む そのときはなしに旧臘某日文春クラブにて佐々木茂索*格別の理由なくして亀井勝一郎を殴打したるよしを聞く 亀井が文藝に寄せたる小説気に入らざりしとのことなれどもこれは理由にならず 佐々木の増長慢もつての外也 亀井に電話してたしかめたるに事実也といふ 此の如き傾向見すごしがたし よろしくこれを打つべし 此日新春はじめての外出也

*佐々木茂索 小説家、編集者、実業家、文藝春秋新社社長

○一月八日(金) 晴。安部公房書下し小説飢餓同盟のゲラ刷を読む これ板元講談社より送り来れるもの也 部分おもしろけれども全体いまだしの感あり

○一月九日(土) 晴。夕銀座鳩居堂におもむきて筆を買ふ。それよりよし田岡田にて小酌 赤坂山むらまで車をとばせて乱酔

に泊る、熱海銀座におもむきてスコットにて小酌 此夜 déclarations d'Amour.

○一月廿八日(木) 晴。帰京、熱海ホテルにては桜花咲きたるに爰元にては積雪数寸也たゞちに四谷見附福田屋に泊 A案内也 たまゝ萩窪に帰れるに斯波武妻玉*の来れるに逢ふ 武事業及女に失敗し失踪中といふ

*斯波武妻玉 兄・斯波武綱の妻、多満のことと思われる

○一月三十日(土) 晴。徹夜にて「家なき子」十四枚書く この昼村口をその麻布の新居に訪ふ

上段：家なき子 十四枚

○一月卅一日(日) 晴、山川朝子福田家に來 原稟をわたす 夕萩窪に帰宅

○二月四日(木) 晴。洛の斎藤菊太郎来話

○二月五日(金) 晴。大田美和来話。夷齋清言の三校をわたす このごろ日記をつけることはなはだ懶し 夜銀座すし仙及よし田にて小酌 ケテルにてみやげを買ひて帰る

○二月六日(土) 晴、午後安部公房来話 さる四日立春の日に女子誕生したることを告ぐ その著飢餓同盟を贈らる 講談社の招きに応じて安部とともに池袋の沖縄料理におもむき沖縄をどりを観る 高橋新吉*山之口猥*に逢ふ

*高橋新吉 詩人

*山之口猥 沖縄出身の詩人

○二月八日―十日* 築地望月にて白峯二十枚書く この宿はよしの紹介也 le 8th février, anniversaire de notre amour

○一月十日(日) 晴。あたゝかきこと仲春のごとし 松平慶義来話

○一月十一日(月) 晴。東劇地下室にてイタリア写真の試写を観る

Altri Tempi* 帰途小まつにて小酌

*Altri Tempi 『懐かしの日々』アレッサンドロ・ブラゼッティ監督

○一月十三日(水) くもり小雨。風邪にて昨日より家居、松井勲川島勝来話すなほち酒を酌む 松井より下関名産ぶぐせんべいを贈らる

○一月十六日(土) 晴。夜すし春にて小酌 小林秀雄白州正子に逢ふ 帰途乱酔 入歯と帽子をおとす

○一月十七日(日) くもり 西萩窪なる伊藤齒科医のもとにおもむき入歯の型をとる 元日につくりたる去年今年の句をはがきに書いて永井龍男に遣る 旧臘付合の約束したることを昨夜すし春にておもひ出したれば也

○一月十八日(月) くもり。朝西萩窪の齒医者にてあたらしき入歯を受取る、午後今官一毎日グラフ記者某を伴ひて来話、写真をうつさんと也 来月にのぼす 夕萩窪駅前泉にて灰皿をあがなふ

○一月十九日(火) 晴。夕奥湯河原加満田に着く、小酌

上段：奥湯河原にて

○一月二十二日(金) くもり。昨夜菅原国隆来泊、けふ辞去す 鳴神原稟の中七十枚だけわたす

○一月二十三日(土) くもり後雪。当地の雪を見ることはじめて也

○一月廿六日(火) 晴。廿三日より昨日までふりつゞきた雪にて東京は大雪九年ぶりとなつたふ。今夕鳴神統稟三十枚書く 全部にて百枚也 菅原国隆の来れるにわたす

上段：鳴神 百枚

○一月廿七日(水) 晴。菅原国隆かへる、A来、Aとともに熱海ホテル

上段：白峯 二十枚

*この間は曜日・天気の記事なし

○二月十一日(木) 晴。日本文化放送にて来月佳人の連続放送をおこなふよしにてそのため挨拶の文一枚半書く

○二月十六日(火) くもり、文化放送芹田来 佳人挨拶の原稟をわたす 夜芝本善彦川島勝、窪田啓作来 窪田泊

○二月十七日(水) くもり小雨 早稲田学校の試験のために今年はじめて登校 山内義雄と大隈会館にて昼餐、帰途銀座よし田にて小酌、新潮社大田美和に夷齋清言の題簽をわたす L'hotel M, Avec Y.

○二月十八日(木) くもり夜に入つて小雪。大田美和来話 夷齋清言の四校を届けらる、尾関栄来話 これこのたび文学界編集長に就任したる挨拶也 豊島与志雄*よりその著山吹の花を贈らる

*豊島与志雄 小説家、翻訳家

○二月廿三日(火) 晴。午後本郷龍岡の開店祝におもむき文藝春秋のひとびとに会ふ 帰途文春クラブに至る このクラブは今年はじめて也 三好達治に逢ふ 岡田にて小酌 HOTEL M AVECY

○二月廿四日(水) 晴。河上徹太郎よりその著詩と真実を贈らる 山田一男来話、芝本善彦同伴也 夜よし来話

○二月二十五日(木) 晴、朝大田美和来 夷齋清言の校正をわたす 尾関栄来 文学界の原稟依頼也

○三月二十五日(木) 晴 毛利よねと離婚す 赤坂区役所に届を出す 池田忠雄をその家に訪ひいく子とのことをいふ

○八月廿五日(水) 毛利よね退去す